四年のあの子は
宇宙人
日本児童文学者協会／編

この本の学年別表示について

この『新・子どもの広場』シリーズは**1**年生から**6**年生までの学年別になっています。それは、いちおう読者の側の便利さを思い、それぞれの年令にふさわしい作品に出会えるようにという配慮からです。
ただし、ほんとうにすぐれた児童文学には、出会いの下限年令はあっても上限年令はありません。ですからこの本の学年表示は、表示されている学年以上の年令なら何才まででも、と考えていただきたいと思います。

新 子どもの広場 4年生

●四年のあの子は宇宙人・ほか16編

日本児童文学者協会／編

もくじ

日本児童文学者協会
「新・子どもの広場」
編集委員会

北川幸比古
木暮　正夫
長崎源之助
宮川　ひろ

表紙絵　菅　　輝男

さし絵　赤星亮衛
菅　　輝男
みくによしお

四年のあの子は宇宙人

日本児童文学者協会／編

新・子どもの広場4

すきな星

大日方　寛

いもうとは
金星——
明るく　美しく　かがやくからだという
「明星」ってよばれていることもお気に入り……

にいさんに聞いたら
「おれは　太陽さ」
なんて　いばっていうんだ
おかあさんは

木星――
あのしまのある　ぶきみな星をなぜだと思う
かわいい赤ちゃんを　何人もつれているのが理由
ぼくの望遠鏡で見てから　すきになったんだって……

ぼくは　なにがすきだと思う
そりゃ　土星――
わけは聞かなくても　わかるだろう

おとうさんは　なんだと思う
自分で光る星
動かない星
北極星――

牛なかせ当番

加藤多一

夕方、テレビを見ていると、かあさんが台所からどなった。

「ユキエ。牛がないているぞ。どうするつもり。」

たしかに、牛舎のほうから牛たちのなき声がきこえてくる。五十頭の牛がかわりばんこになきたてるから、うるさくてしかたがない。

「わたし、知らないよ。ねえちゃんのせきにんだもの。」

わたしは台所にどなりかえした。

朝と夕方、ミルカーでさく乳するのが、ヨシエねえちゃんの仕事。そのあと、牛にえさをくばってあるくのが、わたしの仕事。牛舎のふんのそうじをするのが、とうさんの仕事。これは家族みんなで相談してきめたことだ。

いくらねえちゃんのかえりがおそいからといって、さく乳までわたしのせきにんにされるのはこまる。えさをやるだけでも、小学校四年生の女の子としては、がんばってやっているはずなのに——。

それにしても、ねえちゃんはなにをやっているのだろう。はやく乳をしぼってやらないと、牛たちは乳がはっていたい。

牛のなき声が、いちだんと大きくなる。おこっているんだ、きっと。

〈おうい。はやくしぼってくれよ。乳がいたいよう。それに、そろそろはらすいたよう。〉

牛たちは、たしかにこういっている。

ねえちゃんは、去年高校をでたあと、家にのこってしっかりとらく農をやる予定だった。男の子がいなくて長女だから、ねえちゃんはあととりむすめだ。そのうちに、むこ養子をもらって、牧場をつぐことになっている。

ところが、去年の雪どけのころ、高校を卒業したばかりのねえちゃんが、きゅうにおつとめにでたいといいだした。農協のまどぐち係の仕事だ。そろばんも、卓上計算機もとくいなねえちゃんが、農協の安井さんにスカウトされたのだった。

「ま、いいさ。世話になってる農協だからな。んでも、朝ばんのさく乳は、やってもらうど。」

とうさんが条件をつけた。朝の出勤まえと、夕方、家にかえってからさく乳をやるのなら、うちの仕事にはそんなにひびかない。とうさんはトラクターをつかっての牧草がりや、サイロにサイレージを切りこむ仕事に集中できることになる。

「そのかわり、バイク買ってよ。とうさん。」

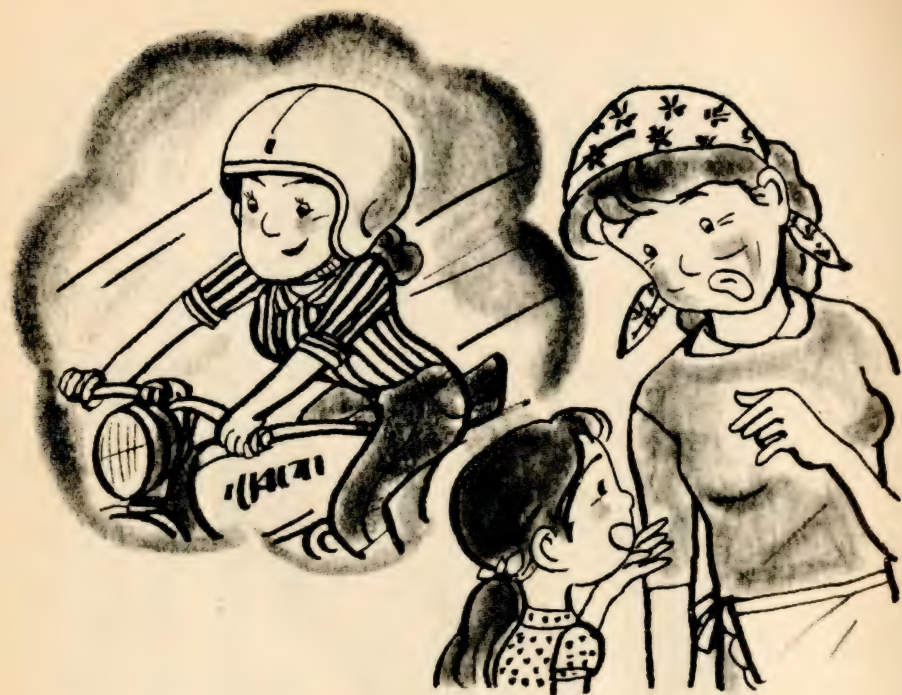
ねえちゃんも条件をつけた。

「ああ、いいさ。そのかわり、給料でたら、毎月、おれにそのぶんの金、かえせよ。」

というわけで、ねえちゃんは月給とりになった。うちのまわりはみんならく農だから、市街につとめにでる人はいない。朝、五時ごろおきて、ミルカーをつかってさく乳の仕事をやって、それから朝ごはん食べて、おけしょうして、毎日ねえちゃんは農協にかよった。

〈一仕事おわらしてつとめにでる親思いのむすめさん〉ということで、地元の新聞にかかれたこともあった。

ねえちゃんは、わたしとちがって、かなりの美人だ。そのねえちゃんが白いヘルメットをかぶってバイクをとばすのだから、とてもかっこいい。〈ミス農協〉とよぶ人もいるし、〈ミス牧場〉なんてひやかす人もいる。

その感心なねえちゃんが、このごろ、ときどきかえりがおそくなる。

「かあさん。あのさあ、ねえちゃんあまりおそいから、とうさんよんで、さく乳やったほうがいいんでないの。」

わたしは、かあさんにいった。

「そうするか。あの子だって、昼間いっしょうけんめいやってかえってくるんだから、たいへんなんだよな。」

かあさんは男のしゃべり方だ。でも、声はやさしい。

「かあさん。ねえちゃんおそいの、伊藤さんのせいでないの。」

かあさんは、ぱっとふりむいて、わたしの目をのぞきこんだ。

「ユキエ。どうして伊藤さんのこと知ってるの——だめだよ。とうさんにいったら——。」

かあさんは声をひくくした。
そのとき、バイクの音がして、ねえちゃんが家の中へとびこんできた。
「ごめん。ごめん。おそくなった。」
ねえちゃんは、あせをふきながらはいってきて、着がえもせず、ブラウスとジーパンの上にとうさんのオーバーオールを着て、さっそく牛舎へとびだしていく。
わたしもあとを追った。
「牛、さわいですごかったんだよ。」
「わかってるって。」
牛舎の前は、タンポポの花ざかり。でも、もう空がくらくなりはじめている。
バケツにお湯をくんで、牛の乳ぶさをあらう。そしてミルカーをとりつける。ミルカーがしぼりはじめると、つぎの牛の乳ぶさをあらうために走りまわる。ねえちゃんはいそがしい。
しかたないから、わたしも乳ぶさあらいを手つだってやることにした。
「ごめんね。ユキエ。」
「そのかわり、伊藤さんのことおしえて。デートしていたんでないの。」
ねえちゃんは、きこえないふりをして、手をうごかしている。

伊藤さんの顔を、一度だけ見たことがある。まだ雪のあるうち、車でねえちゃんをおくってきたときだった。

「ね、ね、キスしたの。」

牛の乳ぶさをあらっているねえちゃんにいうと、おこって追いかけてきた。わたしは、牛舎の出口まで走ってにげた。

とうさんが牛舎にはいってきて、電燈をつけた。わたしとねえちゃんは、また、仕事にもどった。

とうさんもさく乳を手つだいはじめた。おまけに、えさをやるわたしの仕事まで手つだいはじめた。

「どうしたのさ。とうさん。」

とうさんは、なにもいわない。きょうは、みんな、どこかおかしい。

ばんごはんのとき、そのおかしいことがばくはつしてしまった。

「ヨシエ。あの男はだめだといったはずだ。わかってるな。」

とうさんが、ねえちゃんの目をにらんだ。

かあさんが、とうさんの手を上からおさえた。

「ヨシエだって、ばかでないんだから。心配しないでいいよ。とうさん。」
とうさんがはやくねたあと、わたしは、かあさんにいった。
「ねえちゃんが、サラリーマンのおよめさんになって家をでたら、こまるよ。あとつぎ、いなくなるもん。」
「おまえが、まだのこっているしょ。」
ねえちゃんは、わたしの頭をこつんとたたいた。
「いやだ。わたしは、いやだからね。」
「ねえちゃん。伊藤さんとけっこんするの、わたし、反対だからね。とうさんと同じ意見だからね。」
「このやろ。子どものくせに。」
ねえちゃんは、わたしのからだにかぶさってきたけど、いつものようにおしつけてこない。
伊藤さんは、ねえちゃんと同じ年で、農協の店にストーブやテレビをおさめる旭川の問屋の人だ。せが高くて、かっこよくて、のっている車もスポーツタイプだ。
「かあさん。安心して……。」
かあさんは、太い指で、お茶をいれながら、ねえちゃんの口もとを見つめた。

「安心って、おまえ、あきらめたの。」
「――ん。うん。そう。」
「むりしないで、じぶんのほんとうにすきな人だと思ったら、家をでてよめにいってもいいんだからね。」
かあさんは、聞き耳をたてているわたしに気がついた。
「ユキエ。おまえは、もうねなさい。」
「んだって、ねむくないも。」
「それでも、ねるの。ねるの。」
いいよ。ねてやるよ。わたしは、おこって二階にあがった。
(ねえちゃんなんか、なんだ。牛かい当番でなく、牛なかせ当番でないか。牛がかわいそうでないか。)
おこっているうちに、ねむくなって、わたしはいつのまにか、ねむってしまった。
目がさめたのは、ねえちゃんが戸をあけてへやにはいってきて、となりのふとんにもぐりこんだときだった。
「ねえちゃん。」

ねえちゃんはないていた。はじめおさえていた声が、ふとんの中でだんだん大きくなる。

こまった。ほんとうは、ねえちゃんがだれよりもすきなのに——。およめにいくななんて、ひどいことといってしまった。

「ね。ごめんね、ねえちゃん。およめ、いってもいいよ。ね、いきなさい。」

すすりなきが、しばらくつづいて、それからやんだ。

「ばあ。なきまねしてたんだよ、なかないよ。」

ねえちゃんは、くるりとこちらをむくと、ふとんから顔をだして、おどけた。

「もう、きめたさ。らく農(のう)がきらいな男なん

「——。」

て、こまるものね。」
「うん。でもさあ。」
「男なんか、なんぼでもいるさ。へ、へ。」
ねえちゃんは、わらい声をたてた。
わたしは、すっかり気持ちがらくになって、またきいてやった。
「ね。きょう、キスしたの。」
「うん――。だって、さいしょでさいごだもの。」
「わあ。すごい。それで――。」
「うるさい。もうねろ。」
ねえちゃんは、こういうと、ふとんを頭の上までひっぱりあげた。

日曜日のやくそく

国松俊英

1

二学期はじめの水曜日、学校のかえり道のことだ。

野村たけしが団地の公園までくると、だれかがよんだ。ふりむくと、クラスはちがうが同じ四年の安藤と山口だった。

ふたりとも、団地の四年生でつくっている野球チーム〈イーグルス〉のメンバーだ。たけしも十日ほどまえまでそのチームの一員で、ショートをまもっていた。

「なにか用?」

「あのう……、たけしにもう一度チームにもどってほしいんだ。」

安藤がつくりわらいをしながらいった。
「やっぱり、ショートはたけしがいないとだめなんだよ。いま早川がやってるけど、へたくそで、ぜんぜん内野がしまらないんだ。」
山口もうなずいた。
「それでみんなで相談して、たけしにもどってくれってたのもうときめたんだ。こんどの日曜に試合があるんだけど、でてくれないかなあ、たのむよ。」
「もう一度ショートをやってくれよ。」
ふたりはねっしんにさそった。
たけしは気持ちがうごいた。イーグルスの内野にはじぶんがいないとだめだ、というつよい自信があった。
「裕一もいっしょにもどるんだろう？」
たけしがきいた。
「あいつにはたのまないよ。みんな、たけしだけにもどってほしがってるんだから。」
たけしは、すこし考えてから答えた。
「だめだ、わるいけどぼくはもどらない。」

ほんとうはもう一度いっしょにやる、といいたかった。けれど、なかのいい裕一をひとりのこして、じぶんだけイーグルスにもどるなんて、そんなことができるわけがなかった。
「じゃあな。」
ざんねんそうなふたりをのこし、たけしはさっさとあるきだした。

たけしがチームをやめたのは、裕一が原因だった。
裕一はだらしなくて、よくれんしゅう時間におくれたり、さぼったりした。それでよくもんくがでていたが、八月おわりのだいじな試合にずる休みしてしまって、みんなを本気でおこらせてしまった。
「こんどはきびしくいおう。」
みんなはつぎのれんしゅう日に、裕一をつかまえてもんくをいった。裕一はおとなしくきいていたが、みんなはしつこかった。そのうち、松田が裕一のグローブをどろぐつでふんづけたことで、裕一はかっとなり、あばれだした。
松田はなぐられて左目がはれあがり、大野は鼻血をだした。足をけられたものもいた。
「裕一なんか、チームをやめさせろ。」

「チームワークをみだすやつは、いらないよ。」

みんなは口ぐちにいった。

たけしだけが反対だった。

裕一とは一年からずっと同じクラスでなかよしだったし、こんどのことは裕一もわるいが、みんなのやり方だってちょっとひどいと思ったのだ。

けれど、たけしの意見をきいてくれるものはだれもいなかった。

「裕一をやめさせるのなら、ぼくもチームをやめる。」

こういって、たけしは裕一とグラウンドをひきあげたのだった。

2

「おい、あしたの十時だからな。団地の入り口でまってるぞ。」

土曜日、勉強がおわり、そうじがはじまったとき、たけしは裕一をつかまえていった。

「時間まちがえるなよ。」

「うん。」

日曜日にふたりはさかなつりにでかけようと、やくそくしていた。団地のうらには、東京湾

の大きな港（みなと）がある。そこのがんぺきは、ハゼやカレイ、スズキなどのいいつり場になっていた。

たけしは、おとうさんに三度（ど）ばかりつれていってもらって、どういけばいいか、どこがよくつれるかなど、みんな知っていた。

その話をすると、裕一（ゆういち）がつれていってほしい、といいだしたのだ。

その夜、つり道具（どうぐ）をそろえたあとで、たけしはおかあさんに、大きなおにぎりを三こ、小さなのを四こ、つくってくれるようにたのんだ。

三こはたけしのお昼のぶん、四こは裕一（ゆういち）とふたりで三時のおやつがわりに食べるぶんだった。

裕一は、いつも口をうごかしていないとすまないたちで、おべんとうのすぐあとでも、なにか食べるものはないか、といってさがしまわるくらいだったから。

3

つぎの朝は、いい天気だった。

「ぼうしはかぶった？　車に気をつけていくのよ。」

「うん、わかってるって。」

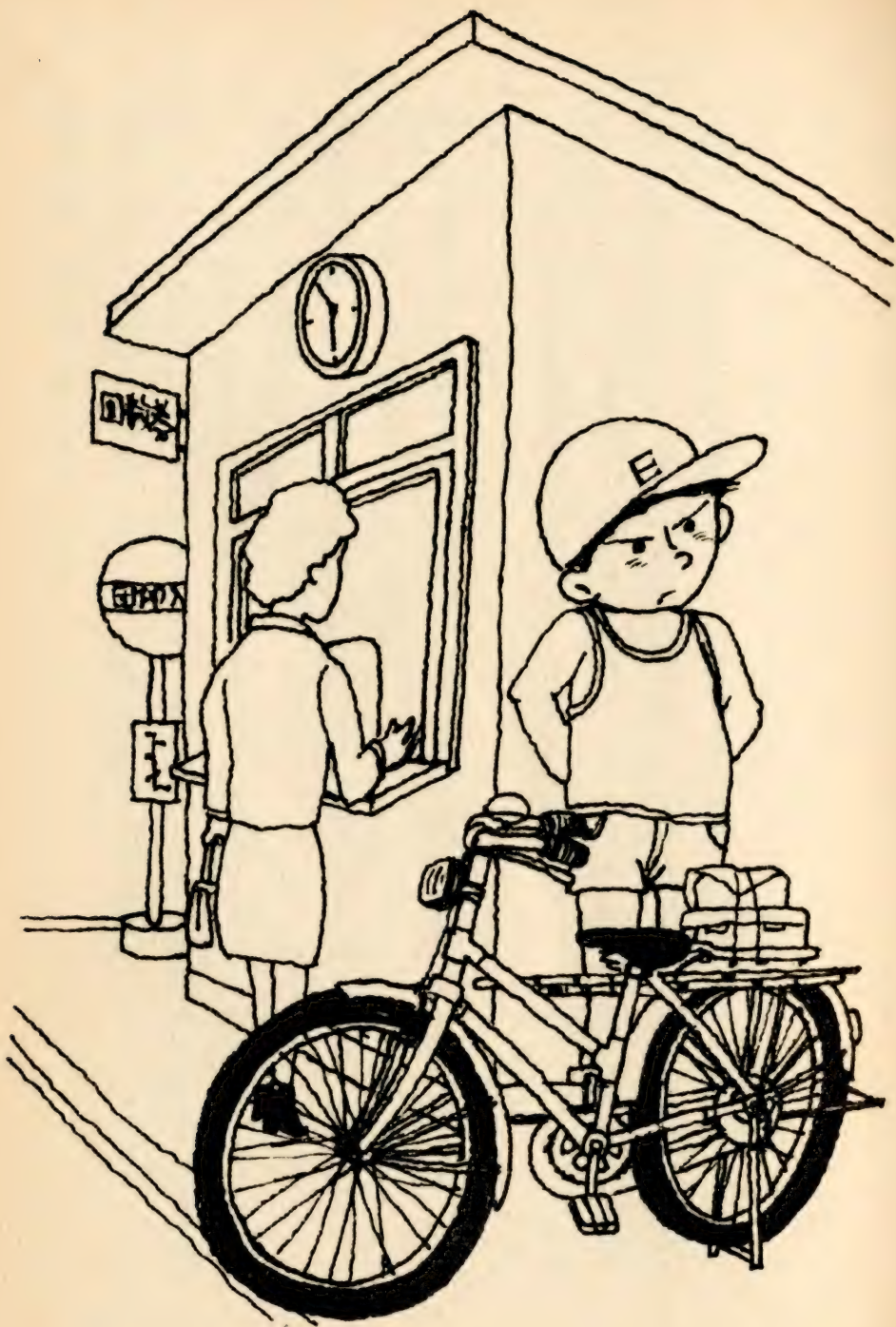
でかけようとするたけしに、おかあさんは何度もくりかえして注意をした。

つりの道具やおべんとうを自転車にしばりつけて走りだした。まぶしい太陽の光を、自転車やからだにいっぱいにうけて走っていくと、心がはずんでくる。

「たくさんつれるといいなあ。」

まちあわせの場所につくと、バス停の時計が十時二分まえをさしていた。裕一はまだきていない。

二十分すぎても、裕一はあらわれなかった。

「なにやってんだろう。おくれるなって、ねんをおしといたのに。」

たけしは、ぶつぶつもんくをいった。
四十分がすぎても裕一はこないので、だんだん心配になってきた。
(裕一のやつ、家でいくなっていわれたんだろうか。それとも、けさになって、きゅうにおなかでもいたくなったんだろうか……。)
たけしは、やきもきしていた。
十時五十分になった。もうまてない。四号館の裕一の家にむかった。
げんかんにでてきたおかあさんがいった。
「裕一は九時にでかけたわよ。」
「ええっ、ほんとに！」
たけしは、思わず大きな声をだした。
「あれっ、たけしくんもいっしょじゃなかったの。イーグルスの試合にでてくれっていわれてでかけてったのよ。きょう、みどり丘団地のグラウンドで、試合があるんでしょ。」
たけしは、太いぼうで頭を思いきりなぐられたように思った。くらくらした。
「きょうの試合はどうしても負けられないからきてほしいって、ゆうべ何度も電話があったのよ。たけしくんとこには、そんな電話いかなかった？」

裕一のおかあさんの話はまだつづいていたが、たけしはがまんできなくなって、外にとびだした。顔がまっさおになっていた。

自転車にとびのると走りだした。港にむかって、がむしゃらにペダルをこいでいった。

くやしかった。裕一も、イーグルスのメンバーも、思いきりぶんなぐってやりたいと思った。

たけしは、走りながらどなった。

「——裕一のばっかやろう、おまえなんか、もう知らないからな。——イーグルスなんか、ぼろぼろに負けちまえ！」

息があらくなってきて、ひたいや首すじにあせがながれた。

4

たけしは、がんぺきでひとり、さかなつりをした。

たのしみにしていたつりだったのに、ちっともおもしろくなかった。えものも、やせたハゼが五ひきつれただけだった。みんな海へはなしてやった。

三時になると、風がでてきた。たけしはのろのろとつりの道具をかたづけ、自転車にしばりつけた。

たけしは、さえない顔でゆっくり自転車を走らせていった。けさ、家をでたときのはずんだ顔とはまるでちがっていた。

団地の近くまできたときだった。むこうから自転車で走ってくる青いシャツの男の子を見て、たけしは、はっとした。裕一だった。

たけしは、知らんふりしていきすぎようとした。

「おーい、たけし、まってくれよ。」

裕一がたけしを見つけて、あわてて自転車のむきをかえた。すぐに追いついてきた。

「たけし、ごめんな。おれ、やくそくやぶっちゃって。それで、あやまろうと思ってさがしにきたんだ。」

たけしは、横をむいて走った。

「安藤が電話で、たけしも試合にでることになったからこいよ、といったんだ。おれ、すっかり信用していったんだよ。けど、たけしがちっともこないから、へんだ、へんだと思ってるうちに試合おわっちゃった。ごめん。」

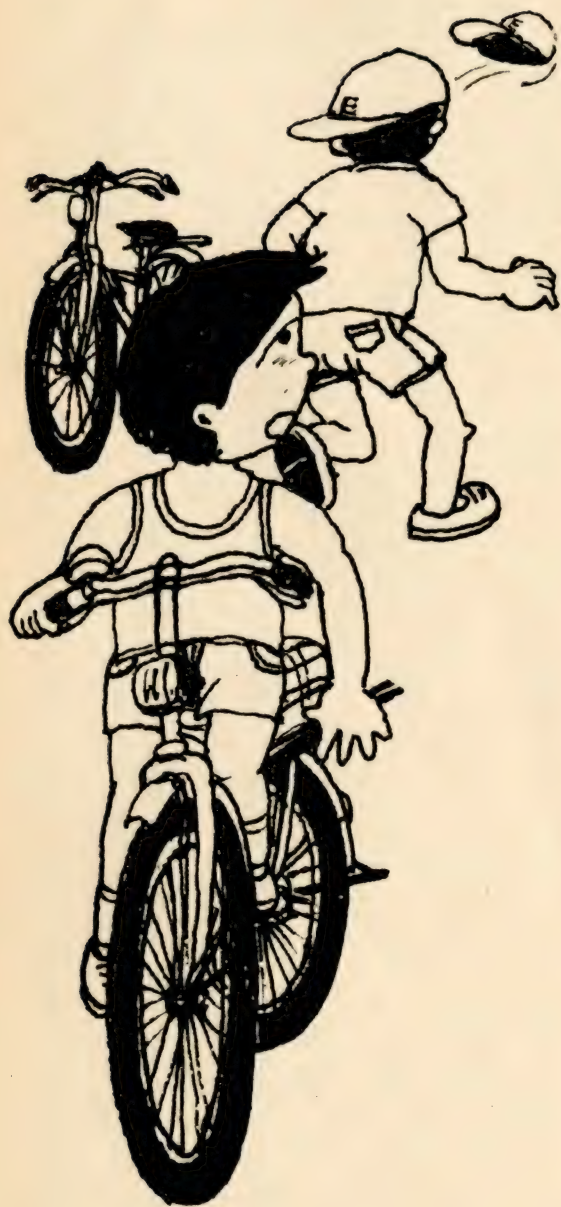
裕一は、ななめうしろから大きな声であやまった。

「いまごろ、なにいってんだ。」

たけしは、こういって自転車のスピードをあげた。裕一もスピードをあげる。

「ま、まってくれよ、たけしー。」

そのとき、ふいてきた風がたけしのぼうしをふきとばした。ぼうしは道路の上におちて、くるくるまわりながら、ころがっていった。

あっ、と思ったとき、裕一が自転車からひょいととびおりて、ぼうしを追いかけていった。

たけしは、自転車にまたがってながめているだけだった。裕一はぼうしをひろってかけてきて、すなをはらってさしだした。
ぼうしをうけとったたけしは、なんといってよいかわからず、こまったような顔をしていたが、きゅうにこんなことをいいだした。
「裕一、おなかすいてるんだろ。」
「えっ、うん、すいてるけど……。」
裕一は目をぱちくりしていた。
「おにぎりが四このこってる、これから食べようよ。」
裕一は、すぐ大きくうなずいた。
「うん、食べる、食べる。」
ふたりは声をあげてわらった。

小山城とかいじゅうグオー

山田もと

「グオー、グオー、グオー。」
池の中から、だれかがよんだのだ。
「だれだ。」
「……。」
夕ぐれどき、小山からおりて池のはたを通りすぎようとしたときだ。修も道代も友一も律夫も、みんなぎくりっとして立ちどまった。
牛のなき声より、もっとどんぶとい声だった。
「もしかして、かいじゅうかも……。」
「まさか。」

友一は道の石ころをひろうと、力いっぱいなげた。白い雲をまだすこしうつしているしずかな池の面に、ちゃぷんと小さな音をたてて石がしずむと、しずかにはもんがひろがっていく。なにもあらわれない。かえりかけると、また、

「グオー、グオー、グオー。」

「やっぱり……かいじゅうかもね。」

「おばけだー。」

修は家のほうへかけだした。

「まてっ、修、つかまえたら、たいしたもんだに。」

「みかたになってもらったら、百人力ね。」

「かいじゅうくーん、でてこいよー。」

返事もなければ、さざなみひとつたたない。かがみのような水の面に、あめんぼがとんで、水すましがわをかいている。

むこうがわは林で、この草道にそったところだけが、水に手がとどくほどの小さな池である。

「おい、かいじゅうくんよ、でてこいよ。」

「おれたち、四年生。なかまにしてやるからよ。」

「用心ぶかいのね。あんたたちをよほどのわるものと見てるのよ。」
「なにをっ。」
友一はすぐおこる。道代を池のほうへつきとばそうとした。
「よせよせ。かいじゅうが見とるんだぞ。」

きのうから夏休みだ。先生が、
「なにか一つ、うまれてはじめてのことをしてこい。四年生の夏休みは二度はないぞ。」
といったことを、四人は実行にうつそうとしているのだ。
とにかく、宿題をやるにしても、およぎをするにしても、ひとりではおもしろくない。
それで、うまれてはじめてのことは、同じ字

でいつもいっしょの四人でやろうと相談して、小山のてっぺんへ城をつくろうと計画した。いま、下見にいってきたところだ。小山の下に、こんな池のあることも知らなかった。

小山は二百メートルほどの高さで、字からすこしはなれて、内海へつきだした梶ガ崎の先端である。

松やひさかき、とっぺらやいぬもちなどがひしめくようにしげっていて、むかし、村の人が、たきものとりや、しばかりにのぼったという道は、雑木や草にけされていてわからない。

四人は、ばらにひっかかれたり、雑木にさえぎられたりで、さんざんなめにあいながらのぼった。それでもやっとてっぺんに立ったら、海は見えるし風はすずしいし、とにかく高いというのがいい。いままでののぼりのくるしさをわすれて、思わず、

「やっほう――。」

「やっほう――。」

と、口ぐちにさけんでしまった。

南がわはだんだん畑で、プリンスメロンのハウスもあれば、とうもろこしの葉もゆれている。すいかやなすもつくってある。北がわは、小さな波が山のすそをあらっている。

「城ができたら、四人で宿題をやろうな。」

「ええぞ、ええぞ、おれみんなにおしえてもらえるで、ええなあ。」

ばあちゃんとふたりきりの修が、はしゃいでいる。

「すいかをもってこようっと。」

「おれはプリンス。」

「わたし、おかしにしよう。」

「ひみつの場にしような。ここのことをだれにもいうなよ。修、ばあちゃんにもいうなよ。」

「うん、いわん。」

小山のてっぺんで、そうちかいあっておりてきたのだ。そこへこの〈グオーかいじゅう〉がなかま入りすれば、どんなにおもしろくなるか、四人はどきどきするほどうれしい。だが、グオーかいじゅうの正体は……。

あくる日、もうおじけづいてでてこない修を、道代がひっぱってつれてきた。

三人で、律夫の家へむかう。家の人は畑へでもいったのか、だれもいない。

「こっちこっち。」

律夫がでてきて、三人を物置小屋にあんないした。

あるある……ござ、ビニール管、ふるい板、ビニールのひも、かま、のこぎりなどなど……。
四人はこれらを手わけして、さげたりしょったりして小山へのぼった。きのうあるいたところが、すこし道らしくなっていて、きょうはらくだ。
小山のてっぺんは木がまばらで、細長いくぼ地になっていた。むかし、へいたいさんがここへも陣地をつくったという話をきいたが、これがそのあとだろうか。四人はそこを城の場ときめた。
「柱は、立っとる木をつかおうや。」
「うん、一本ずつつかまってみまいか。」
どの木を城の四すみの柱にするか、四角になるよう、場所や太さを、わいわいいいながらきめた。
「これでようし。修、柱のほかの、じゃまになる木を切ってくれよ。」
友一が命令をだしている。こんなことは、ふたりの兄たちといつもビニールハウスをつくる手つだいをする友一が、だんぜんつよい。
「横木には、ビニール管をわたせばええぞ。」
「うん。おれ、屋根にござをのせるよ。」

「わたし、かべ。ござをつりさげるだけね。」
「おいおい、屋根をもっと高くしろよ。立って頭がつかえちゃあ、しょうがないぞ。」
「そいだってとどかないもの。」
「柱にのぼってしばれよ。」
「ようし、しりをおしてくれい。」
くすぐったいと、律夫がげらげらわらいながら、修と道代におしあげられている。
まわりの草や小さい木をかって地面にしき、板をならべて、その上にござをしいたら、ちょっといびつではあるが、小屋、いやいや四人のお城のできあがりだ。
「げんだいミニ城、早づくり法。」
「雨がふったら、びっしょぬれ。」
「はっはっはは……兵器もないが、食りょう

もない。」

四人はねっころがったり、とびあがったりして大よろこびだ。

「家からはこんでくるわ、食りょうを。大きなビニールももってきて、屋根にのせましょうよ。」

「グオーかいじゅうは、なに食べるのかなあ。」

「やめてくれ、やめてくれ。あんな気持ちわりいもん、なかまに入れるのは。」

「そいでも、いざというとき、だんぜんいりょくをだすからなあ。」

かべをつけたせいか、あつい。せみの声が下からわきあがってくるようだ。

午前ちゅうにできあがってしまった。午後からまた、食りょうや宿題をもって小山城（そうよぶことにした。）へあつまった。

やっぱり屋根に、ハウスにつかった広いビニールをのせてしばりつけたので、すこしの雨くらい、もう平気だ。

宿題をすこしやった。食りょうはたくさん食べた。が、どうもグオーのことが気にかかっておちつけない。

「どんなかっこうしてるのかな。」

「よいかいじゅうだとええけど。」

「人類にわるさをするかいじゅうだと、たたかわねばならない。」
「やっぱり、すがたを知る必要があるな。」
律夫の提案で、一度家へかえって、夕方にまた、つりざおとえさをもって池のはたにあつまることにした。

よんどる、よんどる。グオー、グオー、グオー……と、あいかわらずどんぶとい声で、しまいがびりりりーとひびくような。一ぴきではないらしい。林のそばとまん中へんと、あれっ、道のそばでも……。
友一は池の深さをたしかめるため、そろそろと道の草をつかんで足を入れていく。下はどろどろしていて、足はなかなか底へとどかない。
やっぱりきみがわるい。あの声からすると、からだは牛のように黒くて大きいだろう。もしみかたになってくれないとしたら、水の中では、たちうちできない。友一は水からはいでた。
「やっぱり、うまいえさでよびよせるしかない。」
「そんなら、つりでいくとするか。」
律夫はつりの名人だ。ひとりでもよくいく。

「はりはつけるなよ。ひとりひとり、ちがうえさをしばれ。」
修はビスケット、友一はすいかのわったの、律夫もプリンスをわったの、道代はにぼしを糸の先にしばった。
「そーれよーっ。」
それぞれ、力いっぱい池の面になげた。しばらく……。
ジャボジャボ、ゴボゴボゴボ、音がして、池の水がゆれだした。道代のつりざおがぐんぐんひっぱられる。友一のもひっぱられる。すごい力だ。
「おれのをひっぱってくれ、律夫、ひっぱれ。」
「修ちゃん、わたしのを……。」
一本のさおを、ふたりずつでひっぱった。たしかな手ごたえだ。ひっぱった。力いっぱいひっぱった。草道にひきあげた。
「ひゃーっ。」
四人はならんで草の上にしりもちをついた。
「どでっかいぞ――。」
「かえるのかいじゅうだ。」

「これ、食用がえるだよ。」
いちばんおそろしがった修が知っていた。
「そうか、これがグオーかいじゅうか。小山城へつれていくのか。」
道にすわったグオーはなきもせず、大きな目玉を、ぐるりんぐるりんうごかしている。すいかとにぼしをしっかりくわえて。
「これじゃあなあ。」
「宿題一つすましたなあ。」
二ひきの食用がえるを、ぽちゃんと池へもどしてやった。

おれたちの花火大会

木村　研

シュルルルル、パアーン。
さいごのロケット花火が、空中ではれつしてきえた。
火のこが草むらにおちると、もとどおりしずかな夜になった。
「チェッ。もうおわりか。」
トオルは、からの紙ぶくろをぞうきんをしぼるように、ぎゅっと、にぎりつぶした。
「ほんと。いつも、これからってところでおわっちまうんだもんな、頭にくるよ。」
サトシは、おしっこをとちゅうでやめたような顔をして、あいづちをうった。
サトシは、四年生のはじめにトオルのクラスに転校してきた。家が近くだった。
だから、夏休みになっても、ふたりはいつもいっしょだ。

「しょうがねえよ。おれたちのこづかいで買える花火って、こんなもんだよ。」
トオルは道のまん中で、ごろーんと、横になった。つめたくていい気持ちだ。
「ほんと、思いっきり花火が、やりたいよ。」
サトシも、ならんで横になった。
くらやみに目がなれてくると、星がたくさん見えてきた。
赤い星、青い星、大きな星、小さな星が、花火のようにひかっている。
「そうだ。やろうぜ。」
ばねじかけのように、トオルがとびおきていった。
「やろうって、なにを……?」
サトシは、トオルの顔をのぞきこんだ。
「うん。花火大会をひらくんだよ。そうしたら、思いっきり花火がやれるだろう。」
「そりゃやれるだろう。でも、ぼくのこづかいは、あと三百円しかのこってないよ。」
サトシは、心細そうにポケットの上からさいふをおさえた。
「へへへ。心配ないって。」
トオルは、かた目をつぶった。

つぎの日、トオルとサトシは、花火大会の準備をはじめた。
まずふたりは、トオルのへやにとじこもってポスターをかいた。

子ども花火大会
月日・八月七日
場所・あき地
時間・夜六時から八時半まで
会費・一けん三〇〇円
責任者・トオル、サトシ

サトシがマジックで字をかいたあとに、トオルが力づよく花火の絵をかく。
「できたぞ。」

「こっちもおわったぜ。」
昼すぎになって、やっと、二十まいのポスターが完成した。
「これで、近所の子どものいる家に一まいずつくばれば、会費が……。」
と、トオルは、指をおって計算する。
「六千円だろう。」
サトシが、横から答えた。
「そ、そう、六千円。これだけあれば、あきるほど花火が買えるぜ。」
「うん。まったく、トオルは天才だよ。」
「へへへ。わるいことにかけては、頭がはたらくんだ。」
トオルは、にっと、みそっ歯を見せてわらった。

そのとき、トオルのおかあさんが、へやにはいってきた。
ふたりは、からだをかたくして顔を見あわせる。
「がんばってるね。ちょっとやすんだら。」
おかあさんは、かんジュース二本とクッキーをつくえの上においた。
「まあね。」
トオルは、とくいそうに鼻をこすった。
「宿題かい。」
おかあさんは、完成したばかりのポスターをのぞいていった。
「そうだ。かあちゃん、おれんちも、会費をくれよ。」
「会費……？」
おかあさんが、ふしぎそうな顔をすると、横からサトシが口をはさんだ。
「このポスターをよんでもらえばわかると思うんですが、花火大会をひらくんです。」
「花火大会？」
「そうです。夏になれば、どこの家でも花火をするでしょう。でも、みんなすぐにおわってしまうから、つまらないと思うんです。だから、みんなで花火をやれば、同じ花火もたくさんや

れるし、たくさん見れるでしょう。だからトオルくんが、花火大会を思いついたんです。いい考えでしょう。」
「な、いい考えだろう。だから、三百円くれよ。」
トオルも、つづけていった。
「さ、三百円ね。」
おかあさんは、まるでまほうにかかったように、さいふの中から百円玉を三ことりだした。
「ありがとうございまーす。」
トオルは、すばやく百円玉をとって、サトシとそろって、ぺこっと、頭をさげた。
チャリン、チャリン、チャリン。
トオルが用意した貯金箱に、三百円がたまった。
おかあさんは、ポスターを見ながら何度も首をかしげて、へやをでていった。
「うまくいったな。」
「うん。この調子なら、すぐに六千円あつまるよ。」
ふたりは、ジュースでかんぱいした。
そして、のこりのポスターをもっておもてへとびだした。

二時間ほどかけて、トオルとサトシは、ポスターをくばりおわって、あき地までもどってきた。
「やった、やった。大成功だ。」
ふたりは、草むらにこしをおろして、オーバーにあくしゅをした。
「いくらあつまったかな。」
トオルがいった。
「六千円にきまってるじゃないか。」
サトシが答えた。
「でも、かぞえてみようぜ。」
トオルは、貯金箱をあけて、ぼうしにうつした。
千円さつが二まいと、百円玉が四十まい

あった。
「六千円か、すごいな。」
サトシが、お金を貯金箱にもどしながらいった。
「どうだ。おれたちは、大金持ちだぜ。なんだって買えるんだぞ。」
「そうだね。」
「だから、アイスを買おうぜ。」
トオルが、サトシのかたをたたいていった。
「アイスか、いいね。」
サトシも、トオルのかたをたたいて答えた。
「ついでに、マンガもいいだろう。」
「マンガ。マンガは、まずいよ。」
サトシは、あわてて首をふった。
「どうして。」
「だって、そんなにつかうと、ばれちゃうよ。」
「そうか。」

トオルは、貯金箱をのぞいて、ざんねんそうにいった。
「花火がやりたくてあつめたお金だから、まずいよ。」
「そうだな。でも、アイスくらいならいいだろう。」
トオルが、指をだしてかた目をつぶった。
「いいよ。二十本買って、みんなで食べよう。」
サトシが、貯金箱の中から千円をぬいた。
あと五千円のこっている。
「よーし。花火を買いにいこうぜ。」
トオルが、さきになってかけだした。
ふたりは、店をかたっぱしからまわって、大きなうちあげ花火からじゅんに買った。
五千円つかいおわったときには、花火がだんボール箱いっぱいになった。
「うひょー。こんなに花火がやれるぞ。」
トオルは、からだをふるわせた。
「さいこうだよ。」
サトシも、同じようにからだをふるわせた。

ポーン、ポーン、ポーン。

夜の六時。連発のうちあげ花火を合図に、子ども花火大会がはじまった。

シューッ、パアーン。

バチ、バチ、バチ、バチ。

けいきのいい花火が、つぎからつぎへとつづく。

「きれいねー。」

「ほら、またあがった。」

子どもたちにまじって、おとなもはしゃいでいる。

トオルもサトシも、さいこうの気分だ。休みなしで火をつける。

「子どもの遊びと思っていたけど、いい思いつきだわ。」

「ほんと、これじゃ三百円なんて、やすすぎるくらいよね。」

トオルのおかあさんとサトシのおかあさんが、はなしていた。

シュルルル、パアーン。

さいごの花火がおわったとき、どこからかはくしゅがおこった。

トオルのおかあさんも、サトシのおかあさんもはくしゅをした。

「花火のあとのアイスは、さいこうだぜ。」
トオルが、ひたいのあせをふいていった。
「トオル、また、花火大会やろうな。」
「うん。ぜったいにな。」
ふたりは、がっちりあくしゅをした。

スカートをはかない女の子

鬼塚りつ子

なお子は、四年生。野球の大すきな女の子である。

なお子は、スカートをはいたことがない。

どこへいくにも、ショートパンツか、ジーパンをはいていた。学校へいくにも、そうだった。

四年生になってからは、野球のユニホームのまま、登校することもあった。

ママは、あきらめたのか、さいきんではもう、なにもいわない。

きょうもなお子は、お気に入りの、〈フェニックス〉のユニホームを着て、学校への道を、いそいでいた。

〈フェニックス〉は、なお子たちのすんでいる、緑台団地の子ども会でつくっている、野球チームだ。

「おい。四年二組の女の子。」
うしろから、太い声がした。
「おい、おたんこなす。おまえ、耳ないのか。」
せなかを、どすんとこづかれて、なお子は、きっとなってふりかえった。六年生の男の子が、ふたり立っていた。なお子と同じ団地にすむ、新井しんと、斉藤つよしだ。
「ほそいなおこ。ちゃあんと、名前があるんですからね。名前よんでよ。そしたら、返事するわ。」
「へえ、ふといじゃないのか。だいたい、おまえ、女の子のくせして、なまいきだぜ。ユニホームなんか着て、学校へくるなんてさ。」
「そうだ。四年生のくせして、こいつ、なまいきなんだ。」
しんも、つばきをとばしながらいった。
つよしが、なお子のえり首をつかんだ。
「こんなもの、ぬいじゃえよ。」
「はなせよ。ユニホーム着て、どこが、わるいってんだよー。学校へユニホーム着てきてはいけないって、きそくあったかよー。」

「なんだ、こいつ、ほんとに、女か。」
つよしが、あきれてさけんだ。
「こいつ、六年一組の細井の妹だぜ。」
「ああ、あのガリ勉の細井か。なおっぺとかいったな。おまえんち、まちがってうまれてきたんじゃないのか。細井のやつに、スカートはかせたほうが、よっぽどにあうぜ。なあ、しん、

そうだろう。あいつ、女みたいなやつだからな。」
つよしが、調子にのって、しゃべりすぎたのが、いけなかった。
「おにいちゃんの悪口いったな。こうしてやる。」
「ぎえっ、なにすんだ。こいつ。」
つよしが、ひめいをあげた。なお子は、つよしのうでに、本気でかじりついたのだ。
「つよし、先生だ！」
しんが、そういったとき、なお子たちのたんにんの山本先生が、あわてて、自転車をおりるのが見えた。
「おい、よさないか。男の子ふたりがかりで、よわいものいじめするのは。あいては、かよわい女の子じゃないか。はじを知れ、はじを。斉藤つよし、ええ、新井しん。」
山本先生は、ふたりのかたをつかんで、いった。
「ちぇっ、なにがかよわい女の子かよ。おぼえていろよな。」
ふたりは、じろりと、なお子をにらむと、先生の手をふりほどいて、にげていってしまった。
先生が、いってしまったあと、
「おい、細井、いまのすごかったな。」

「六年生に、むかっていくなんてさ。」
同じ〈フェニックス〉のカッチンと、ヨッチンが、どこで見ていたのか、なお子に追いついてきて、いった。
「きょうのれんしゅうは、三時からよ。いつもの三角公園に集合すること！」
なお子が、それだけいって、かけだそうとしたので、ヨッチンがあわてて、ひきとめた。
「きょうのれんしゅう、いけないよ。」
「どうして？」
「きょうは、団地のすもう大会があるんだ。おまえ、知らなかったのか。」
「むりないよな。細井は、これでも、おんななんだからな。野球はできても、すもうは、とれないさ。」
　カッチンが、にやにやわらいながらいった。
「十人勝ちぬくと、鉄道もけいをもらえるんだってさ。」
　ヨッチンが、もうもけいをもらったような顔をしている。
（鉄道もけいか。おにいちゃん、とってもほしがってたなあ。高いから、だめですって、ママにしかられていたっけ。あしたは、おにいちゃんのたんじょう日なんだ。）

「ねえ、ねえ、すもう大会、どこでやるの？」
「おまつり広場。時間は四時から。おまえ、でるのかよー。」
「ううん、おうえんにいったげる。」
なお子は、ふっふっとわらうと、赤い手さげかばんを大きくふりながら、校門の中へきえていった。

四時になった。
なお子のママは、夕食のしたくをしていた。
天井をにらみつけたまま、玉ねぎをじょうずに、みじんに切っている。こうすると、なみだがでないからだ。
「細井さんのおくさーん。おまつり広場で、なおちゃん、すもうとっているんですって。」
団地でいちばんうるさい、がちょうおばさんこと、ヨッチンのおかあさんが、庭づたいにやってきて、さけんでいる。
「うちのなおっぺは、すもうぐらい、とりますよ。」
ママは、小さな声でつぶやくと、すこしもさわがず、あいかわらず天井をむいたまま、とん

とんと、ほうちょうをうごかしていた。
「なおちゃん、はだかで、すもうとっているんですってよ。」
「ええ？」
さすがのママも、おどろいたようすだ。エプロンで手をふきふき、とびだしてきた。
であいがしらに、とおるとぶつかりそうになった。
「ママ、なにあわててるの？」
「あっ、とおる。なおがね、はだかですもうとってるんですって。」
「まさか。でも、なおっぺのことだから、ほんとかも……。」
とおるとママは、おまつり広場にかけつけた。
「ワァワァ、ワァワァ。」
子どもたちのかん声で、おまつり広場は、たいへんなにぎわいだった。どひょうのまわりには、たくさんの人がきができて、すもうは、最高潮のときをむかえていた。
「まあ、なおったら、ほんとに、はだかだわ。はずかしいわ。どうしましょう。見ていられないわ。」
ママは、そういいながらも、どこからもってきたのか、りんご箱の上にのっかって、けっこ

うたのしそうに、どひょうの上のなお子を見物している。
なお子は、短パンこそはいてはいたが、上半身は、はだかだった。まわしをきちんとしめている子どもも何人かいたが、ほとんどのチビッ子は、なお子と同じような、かっこうをしていた。
「なんだ、なんだ。へえ、女ずもうか。」
「なかなか、やるじゃないか。」
新聞配達のわかものが、自転車をとめて、のぞいていった。買い物がえりのおばさんや、つとめがえりの人たちも、ものめずらしそうに、見物している。
八人めの、なお子のあいては、カッチンだった。野球のときは、なお子がピッ

チャー、カッチンが、キャッチャーで、息(いき)のあったプレーをしていたが、すもうとなると、いささか勝手(かって)がちがう。

なお子のはだかを前にして、カッチンは、かっと頭に血(ち)がのぼった。

(だいたい、細井(ほそい)のやつ、どうかしてる。T(ティー)シャツぐらい、着(き)てきたらよさそうなものだ。)

カッチンが、まごまご、どきどきしているうちに、なお子は、がっぷり四(よ)つに組(く)んできた。

「ケ、ケ、ケ、ケ。」

カッチンは、くすぐったくてたまらない。そんな、カッチンのすきをみて、なお子は、カッチンの足をすくった。

「いてえ！」

思わず、しりもちをついたカッチンのようすが、よほどおかしかったのか、どひょうのまわりに、どっとわらい声がおきた。

「細井、がんばれ！　あと、ふたりだぞ。」

とっくに負けたヨッチンが、どひょうのそでで、なお子より、まっかな顔をしてどなっている。

「にーしー。あらいやま。」

みつみのおっちゃんの呼びだしに、六年の新井しんが、かたをゆすってどひょうにあがってきた。九人めのあいてだ。なお子が、いくら体格がよいといっても、やはり四年生だ。六年生の新井しんとは、くらべものにならなかった。

「なおっぺ。けさのかたきだ。かくごしろ。」

そういうと、新井しんは、なお子の短パンのベルトを、むんずとつかむと、すごい力で、なお子をなげとばした。

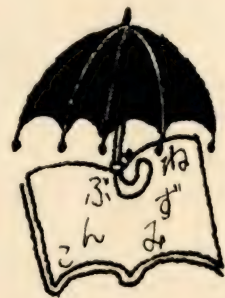
「いたーい。」

なお子は、思わず顔をしかめた。くちびるをきゅっとかんで、なみだをこらえた。そんなな

なお子を見て、兄のとおるが、どひょうにかけあがってきた。
「なお、だいじょうぶか。新井しん、すこしは、手かげんしろよな。あいては、女の子じゃないか。」
　しんは、ふんと鼻先でわらった。
　十人勝ちぬいたのは、新井しんひとりだった。
　なお子は、八人勝ちぬいて、大きなプラモデルをもらった。
「おにいちゃん、なおね、十人勝ちぬいて、鉄道もけいを、おにいちゃんにプレゼントしたかったんだ。プラモデルになっちゃって、ごめん。」
「こいつ！」
　とおるは、なお子の頭をかるくコツンとたたいた。
「鉄道もけいより、プラモデルのほうが、ずっとすごいや。こんなの、まえから、ほしかったんだ。なお、ありがとう。」
「おにいちゃん、ほんとう。」
　なお子の顔が、ぱっとかがやいた。するとそこに、ママがとびだしてきた。
「なお子、やったわね。」

「パパも、見てたよ。」
ママのうしろに、せびろすがたのパパが、わらいながら立っていた。
「でも、四年生でこれじゃ、さきが思いやられるわ。」
「なに、心配することないよ。なおは、いまのままで、じゅうぶん、かわいいじゃないか。なあ、なお子。」
「そうだよな。スカートはいていたって、男の子みたいな女の子、いっぱいいるんだからな。はだかで、すもうとったって、なおのほうが、よっぽど、女らしいや。」
おにいちゃんだって、新井しんや斉藤つよしより、よっぽど男らしいと、なお子は思った。

しげるのねずみ文庫

上田敏子

しげるの家は、団地の五階です。そこで毎週水曜日に、本のすきなおかあさんがあつまって、文庫をひらいていました。

きょうは水曜日。でも文庫は、おかあさんたちのつごうでお休みでした。

外は、雨がふっています。しげるがなかよしのつよしと、しげるの家で宿題をしていたときでした。「カチャ、カチャ。」と、げんかんでノブをまわす音がしました。

しげるがドアをあけると、小さな男の子がふたり立っていました。

「なあんだ、てっちゃんか。きょうは文庫、休みだよ。おかあさんたち、市の図書館へ文庫のことで勉強会にいったから。」

しげるがはなしていると、

「どうしたんだ。」
つよしも、わきから顔をだしました。
「てっちゃん、文庫が休みなの知らなかったんだって、どうする。」
しげるが助けをもとめると、
「どうするって、休みなんだから、かえってもらうよりしかたないだろ。」
つよしはあっさりしたものでした。
てっちゃんたちは、のそのそと階だんをおりはじめました。つよしはドアをしめかけて、
「おい、てっちゃん、その子だれだ。」
と、声をかけました。
「親せきのたかちゃんだよ。この子んち、赤ちゃんうまれるんで、いま、ぼくんちにひとりできてるの。」
ひとりっ子のつよしは、ちょっと感心したような顔でドアをしめました。どうしようかまよっていたしげるは、とっさにドアをあけると、
「てっちゃん、すこしあそんでいけよ。」
と、よびとめました。

「しげる、宿題どうする気だ。やってないとおかあさんにしかられるぞ。」

つよしがあわてて、しげるのせなかをつつきました。

「ちょっとだけだよ。宿題はそのあとすぐやればいいじゃないか。おおい、てっちゃん。」

しげるはつよしにかまわず、てっちゃんをよびいれました。

しげるが五さいのときのことです。妹のさち子がうまれました。おかあさんが病院からかえるまで、いなかのおじさんの家にひとりであずけられたことがあったからでした。

「しげるちゃん、いいの?」

と、てっちゃんはうかがうようにききかえしました。

「うん、そのかわりちょっとだけだよ。ぼくたち宿題があるからな。」
「よかった。ちょっとでもいいよ。ぼくんちいま、家にだれもいないんだ。」
一年生のてっちゃんは、じぶんよりすこし小さいたかちゃんの手をひっぱって、家へあがりました。
「どうする気だ。ぼくはちびとあそぶのなんて、ごめんだぞ。」
と、つよしは口をとがらせました。
「たのむよ。せっかくきたのにかわいそうだろう。一時間ぐらい、ぼくらで文庫ひらこうよ、なっ。」
しげるはしんけんでした。
「ばっかだなあ、きょうは文庫、休みなんだぞ、もうだれもくるもんか。」
「だから四人だけでさ。」
でもさっきから、てっちゃんたちは心配そうに、ふたりの顔を見くらべています。
「いいよ。そのかわり、しげるがよみきかせやるんだぞ。ぼくは、よむのにがてだからな。」
つよしは、しぶしぶしょうちしました。
「よし、これできまった。さあ、なによもうか。」

しげるが声をかけると、
「なんでもいいよ。」
てっちゃんは、えんりょがちに答えました。
「つよし、カーテンぜんぶひいてくれ。」
しげるがたのむと、
「ようし、ぜんぶだな。」
やっと、いつもの気持(きも)ちのよい返事(へんじ)がかえってきました。
「なにするの。」
と、てっちゃんたちも目をかがやかせています。
「いますぐわかるから、まってろ。そうだ、たかちゃん、てっちゃん、『トンネルのぼうけん』と『子ざるのキッキー』をぼくといっしょに見つけてくれ。」
しげるは、小さいころから大すきで、おかあさんに毎日せがんでよんでもらった二さつをさがしました。
外はこまかいきり雨(さめ)がふっています。そのせいか、いやにしずかでした。カーテンごしに、うす青い光がはいってまほうにかかったみたいです。色とりどりの絵本の背表紙(せびょうし)の色までか

わって、いつもの文庫のへやとはまるでちがって見えました。

「うわあ、海の中にいるみたい。」

「おばけえ。」

てっちゃんたちは大よろこびで、およぐまねや、おばけのかっこうをして大はしゃぎです。

「まだこれじゃ明るくてだめだ。へやの中をまっくらにしたいんだけどなあ。」

しげるがつぶやくと、

「それじゃ、おしいれがぜったいいいぞ。」

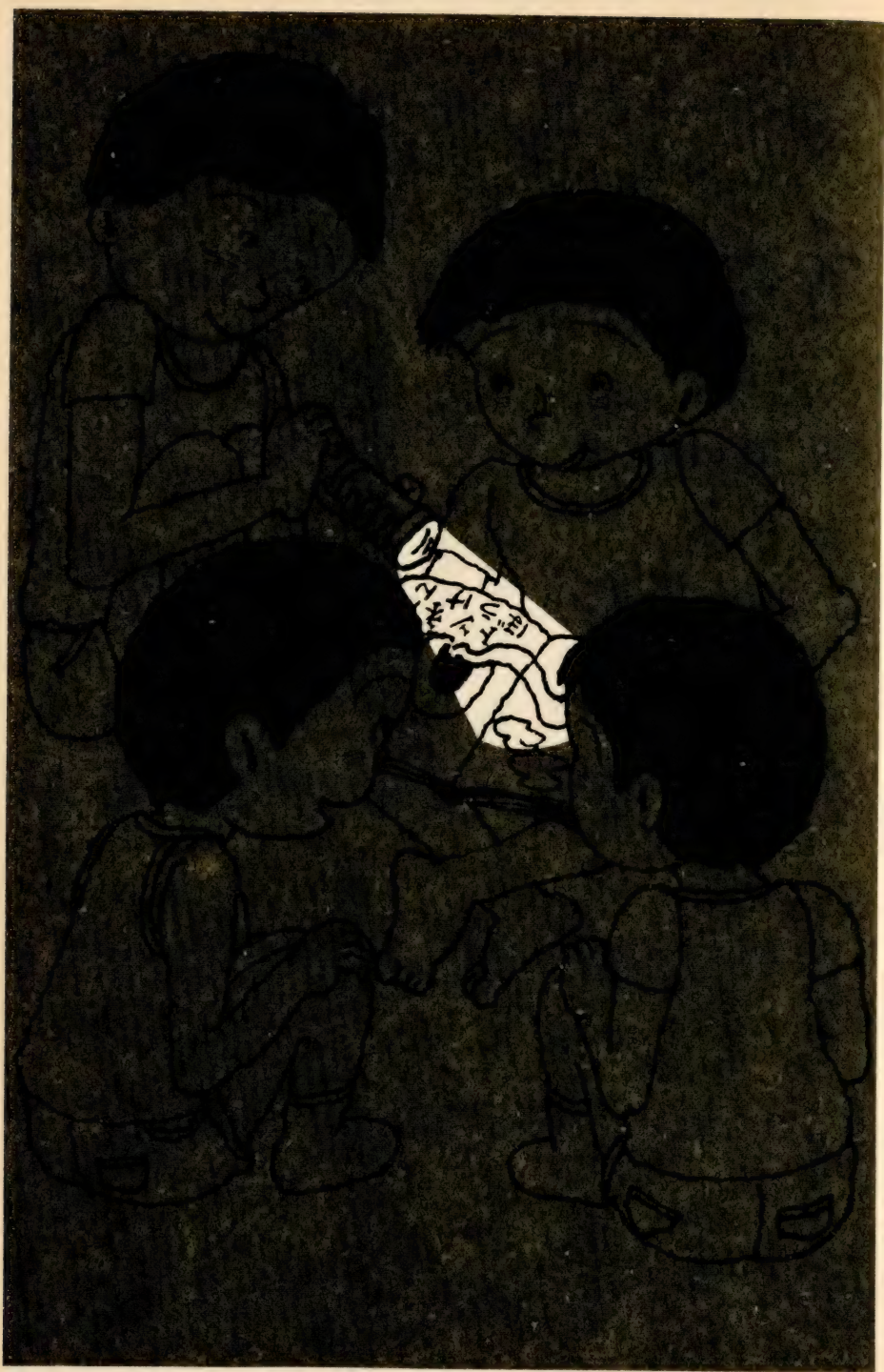
つよしは、いやに自信ありげにいいました。

「それ、いただき。」

と、半間のおしいれをあけると、下のだんは本のはいった箱、上のだんには本のカードや、ふうとうのはいっただんボール箱がいくつも入れてありました。上のだんのだんボール箱をぜんぶだして、かいちゅう電燈をもってきて準備は完了しました。

かいちゅう電燈をもったつよしを先頭に、てっちゃん、たかちゃん、さいごに本をもったしげるがおしいれにのぼると、ミシッと大きな音がしました。四人は、ひざをかかえてかさなりあうようにすわりました。ドアをひっぱると、おしいれの中はまっくら。ほんとうに「シーン。」

という音がきこえてきました。
「ぼくたちみんな、ねずみみたいだね。」
てっちゃんが小声でいいました。
「そうだ、さあ目をつむれ、ぼくらはねずみになったんだ、いいな。」
つよしの合図で、ぎゅうと目をとじました。
「三、二、一、ゼロ。」
いっせいに目をあけると同時に、つよしがかいちゅう電燈をつけました。
天井いっぱいに二重にまるい光がうごいて、ベニヤのかべの木目が、いやにはっきりてらしだされました。
「たいへんおまたせいたしました。まいどおなじみのねずみ文庫でございます。みなさまのおこのみの古本、古雑誌、なんなりとご注文ください。さっそくおよみいたします。」
しげるがふざけてはなしはじめると、
「ねこには、じゅうぶんごチュウイねがいます、チュウ。」
つよしもわらいながら、つけくわえました。
本を横からてらす光のわが「クッ、クッ、クッ。」と四人のわらい声といっしょにこきざみに

ゆれて、うすにじ色のわの中に『トンネルのぼうけん』と大きな字がうかびあがりました。
たのしい時間がしばらくすぎたころでした。
「リーン、リーン。」
四人のからだがびくっとかたくなりました。
「なんだろう。」
つよしが、いやにまじめくさっていいました。
「近くにねこがあらわれた合図だ。どうする。」
ついしげるもつりこまれて、いやに小さい声ではなします。
「し、しずかに。」
きんちょうした声で、つよしが命令しました。ベルはなりつづいています。
「しつこいなあ。ええい。とまれ。」
四人が同時におまじないのようにさけんだとたん、「リン。」となってベルはやみました。
「やったあ。」
みんなの顔がほころびます。
「つかれたろ。すこしかわるよ。」

と、つよしが手をさしだしたので、しげるはびっくりしましたが、

「たすかった、たのむよ。」

と、本とかいちゅう電燈をとりかえました。長いあいだびくともしないできいていた、たかちゃんが、ひとひざのりだしました。つばをのむ音が、へんに大きくひびきます。

　ねずみ文庫は、しずかにつづいていました。

「コッ、コッ、コッ……。」

　下のほうからしだいに、くつの音があがってきました。

「あっ、あの足音は、うちのおか……。」

　うちのおかあさんといいかけて、しげるはおかあさんとはなれているたかちゃんがいたことに気がつきました。あわてて、

「うちのおかずをねらっているねこの足音だ。手ごわいぞ。きょうのねずみ文庫は、これまでで時間ぎれです。」

　光もぱっときえました。おしいれからつぎつぎととびおりると、へやの中は、いぜんと同じ水の底みたいに、にぶくしずんでいました。

　カーテンをあわててあけると、まどから明るい光がはいってきました。

「いつかまた、つづきやってね。」
てっちゃんがいうと、たかちゃんも、
「おもしろかったね。」
と、まんぞくそうです。
「そうか、こんどはもっとうまくよんでやるからな。」
と、つよしもまんざらではなさそうです。
「ガチャン。」と、げんかんのかぎのあく音がして、おかあさんと妹のさち子がかえってきました。
「ただいま。おそくなってごめんなさい。いやにしずかだこと、ふたりともおひるねしてたんじゃないの、いくら電話してもでなかったのよ。」
「ねてなんかいなかったよな。」
と、しげるは、みんなの顔を見まわして、すこし小さく答えました。
「おふたりさん、宿題はできましたか。」
「まだでえす。」
「四年生になったのに、ふたりともどうしたの、もうすこししっかりしてくださいな。」

と、おかあさんがへやをのぞきこみました。
「まあまあ、おへやの中がたいへんだこと。あら、てっちゃんきてくれたの。おにいさんたち、ちゃんとあそんでくれたかしら。」
「うん、みんなでねずみ文庫してたんだ。おもしろかったよ。」
てっちゃんがとくいそうに答えたので、おかあさんはうれしそうに、
「よかったこと、みんなえらくなったのね。こんど、おかあさんもねずみ文庫のなかまに入れてね。」
と、にっこりしました。
そろってジュースをのむと、あせばんだからだの中に気持ちよくジュースが通っていきました。でも、それとはちがった、ほかのわ

くわくしたものが、たしかにおなかの底のほうでうごいていました。へやの中をかたづけていると、
「ねえ、なにしてあそんだの。」
さち子がかいちゅう電燈を見つけてきました。
「ないしょ、ないしょ。」
そろって合唱したので、
「みんなのいじわる。大きらい。」
と、さち子はすこしふくれっつらをしてみせました。
「そうだ、これからかたつむりとりにいこう。さっちゃんもいっしょにこいよ。」
というと、つよしはいちばんにくつをはきました。
「てっちゃん、たかちゃん、かさわすれるな。」
と、まるで弟にいうみたいにつよしがいったので、しげるはすこしおかしくなりました。
五人は階だんをタ、タ、タ……と、いっきにかけおりました。雨はすっかりあがっています。
小さい水たまりを、それぞれおおげさなかっこうでとびこえて、雨にあらわれてあざやかにさいているあじさいの植えこみの中へかけこみました。

あいつのアカンベエ

佐伯道子

土曜日の学校のかえり、ヒサシはいつものように牛乳屋のかどを左にまがった。
そのとたん、右がわの家から、ワワワワワンと、けたたましく犬がほえだした。
見ると、まっ白いスピッツが、いけがきのすきまからほえている。
「あれっ、このうち、ひっこしてきたんだ。」
庭先には、まだ、だんボール箱やロープがちらばっている。
けさ学校へいくときは、荷物もなかったし、犬もいなかった。
犬がくさりにつながれているのを見て、ヒサシはほっと安心した。なにしろ、ヒサシときたら、犬が大きらいなのである。
「いやなやつ。……ようし。」

ヒサシはもっていた習字道具入れを、ひざのあいだにはさんだ。それから、両手の中指を口の中に入れ、親指で目をつりさげて、犬にむかって思いきり「アッカンベエ。」とやった。
スピッツは、荷物のかげにからだをほとんどかくしてほえつづけている。
すると、「アッカンベエ。」というかん高い声が、犬のなき声のあいまにきこえた。
「犬が？　まさか。」
ヒサシがあたりを見まわすと、二階のまどから、かみの毛をかたまでたらした女の子が、ヒサシよりももっとすごいアカンベエをしてヒサシを見おろしていた。
ヒサシは、犬にとつぜんほえられたときよりもっとびっくりした。
とんでもないところを見られてしまったと思うと、はずかしかった。
そんな気持ちをはらいのけるように、ヒサシはもう一度、こんどは女の子にむかってアカンベエをした。そして、くるりとうしろをむくと、家にむかって走りだした。

月曜日。登校のとき、ヒサシはまた、あのスピッツにほえられた。
アカンベエまでしたので、犬は、いつでもヒサシのことをほえるつもりでいるらしい。
昼休みに、ヒサシは同じ四年三組のアキラたちといっしょだった。

外にでるまえに、げたばこのところでふざけていると、四年一組の女の子たちが三人でやってきた。
「あぶないわ、こんなところでふざけていて。じゃまよ。」
ヒサシたちがふりむくと、まん中の女の子が、ヒサシを見て、にやっとわらった。
「おとといはどうも。」
「おととい？」
ききかえしたヒサシは、とたんに土曜日のことを思いだした。
まん中の女の子は、あのアカンベエをした女の子だった。
ヒサシはみるみるうちに、顔が赤くなるのが、じぶんでもわかった。
四年一組の女の子たちは、「ふふふっ。」とわらって、げた箱からくつをとった。それから小走りに運動場にでていった。
しょうこう口をでるとき、アカンベエの女の子は、さっとうしろをふりむくと、ヒサシにむかってアカンベエをした。
「なんだ、あいつ。」
女の子のアカンベエを見たアキラが、あきれてヒサシの顔を見た。

「へんなやつ。」

ヒサシはわざとおおげさに、はきすてるようにいった。

（——転校してきたばかりだというのに、もうあんなにいばっている……。）

女の子のまあたらしい名ふだに、〈四年一組　坂本ゆかり〉とかいてあったのを、ヒサシはいつのまにかおぼえていた。

ゆかりの家のそばを通るたびに、ヒサシはゆかりの愛犬にほえられた。

そして、ゆかりは、スピッツにアカンベエをされたのが、よほどしゃくにさわったのか、ヒサシの顔を見ればかならずアカンベエをする。ゆかりときたら、人が見ていたっ

て、まったく平気なのである。

ある夕方、ヒサシは遊びからかえるとちゅうだった。愛用の青いグローブに、げんこつをすとんすとんとうちこみながらあるいていた。

ふと気がつくと、もう一つむこうの道のそばのあき地で、女の子が自転車にのっていた。ぴかぴかのあたらしい自転車は、よろよろとほんのすこしうごいては横だおしになる。

（あっ、あいつだ。）

あのかたまでのびたかみの毛と、細い手足は、ゆかりにまちがいない。

（あいつ、自転車にのれなかったのか。）

そういえば、近所にすんでいるのに、ゆかりが自転車にのっているところを、ヒサシはまだ一度も見たことがない。

しかし、あんなに活発なゆかりが自転車にのれないなんて、ヒサシにはなかなかしんじられなかった。

（とくべつなのり方のれんしゅうでもしているんじゃないだろうか。）

そう思ってようすを見たが、どう見ても、ゆかりは、ふつうの自転車のりを、ぶきようにれんしゅうしているだけだった。

このへんでは、たいていの子は小学校へはいるまでには自転車にのれるようになっている。たいらな土地で坂がないから、自転車さえあれば、どこへでもらくにいくことができる。だから、おとなも子どもも、みんなよく自転車を利用する。バスの便利がわるいということも、自転車がさかんになった理由の一つかもしれない。

転校してきたゆかりも、自転車にのれない不便を感じたのにちがいない。ここでは、友だちと遊びにいくにも、みんなで自転車で、ということがおおいのだから。

（あいつをやっつけるいい材料があったぞ。）

ころんだところをひやかしてやろうと思って、ヒサシはあき地のほうへとあるいていった。

ゆかりなら、ここからでも大声ではやしたてるかもしれないが、ヒサシには、そんな勇気はない。

ゆかりは、むちゅうになってれんしゅうしていた。ヒサシがあき地のすみの木のかげまで近よっても、ぜんぜん気づかない。

ゆかりは元気がいいだけあって、運動しんけいはわるくないらしい。

ヒサシが見ていると、ゆかりの自転車は、するすると、どうやらうまくすべりだすことができるようになった。

（――やや、うまくなってきたぞ。）

ヒサシはがっかりした。このままうまくのれるようになってしまったら、わらってやるチャンスがなくなる。

でも、ゆかりのハンドルはふらふらしている。するすると走りだした自転車(じてんしゃ)は、あっちへよろよろ、こっちへよろよろ。

そして、あき地のむこうのすみっこにむかってすすんでいった。

（――あいつ、どこへいくつもりだ？）

ヒサシがそう思うまもなく、そのまま、あき地のすみっこにつっこんだ。自転車とゆかりはたおれた。ゆかりはたおれたまま、なかなかおきあがらない。

（――どうかしちゃったのかな。）

わらってひやかしてやるどころではない。

ヒサシは心配になってきた。

「だいじょうぶかあ。」

いつのまにかヒサシは、ゆかりのほうへ走っていた。

ゆかりは、もぞもぞとからだをうごかして、顔をヒサシのほうにむけた。

ひざこぞうから血がにじんでいる。

ヒサシはグローブをおくと、たおれた自転車をおこした。

そばに、バラ線のふるいのがひとかたまりになってころがっていた。

どうやらゆかりの自転車は、これにのりあげたらしい。あたらしい自転車の前輪のタイヤがパンクしていた。

「とまろうとしたんだけどね。」
ゆかりがしょんぼりといった。
「この上にころばなくてよかったよ。」
ヒサシは、ハンドルがまがってしまったのを足ではさんでなおした。
ゆかりは、いつものゆかりとはべつの人みたいだった。だまってヒサシのやるのを見ている。いまにもなきだしそうな顔だ。
「自転車、おまえんちまで、もっていってやるよ。」
「うん。」
ゆかりは、すっかりしょげかえっている。
ヒサシはなんだか、ゆかりがかわいそうになった。
「自転車はパンクしただけだから、すぐなお

してもらえるよ。」

グローブを前かごに入れてヒサシは自転車をひいていった。前のタイヤがぺたんこだ。

ゆかりの家のかどまでくると、スピッツがゆかりのにおいをかぎつけたのか、あまえ声をだした。

それから、ヒサシがいるのに気がついて、ちょっとほえてみた。

ヒサシがゆかりといっしょなので、まよっているみたいだった。

自転車のことがあってから、ゆかりは、ヒサシにであってもアカンベエをしなくなった。

そのかわり、ヒサシの顔を見て、にこっとわらう。ゆかりがわらうと、小さなえくぼができる。

でも、ヒサシは、てれくさそうに、ほんのちょっぴり、にやっとわらうだけだ。

ぼくのグッピー二〇一号

佐藤ノブ子

ぼくの名はユウ。四年生。

かあさんは小さなパーマ屋をしている。

にいさんは六年生で、飛行機づくりの天才。すごいこり性で、もけい飛行機の部品をあれこれ買いかえたり、くふうしてつくる。その材料あつめのときや制作ちゅうは、さんざんぼくに助手をさせる。

でも、にいさんは世界一のけちだから、あたらしくこしらえたグッピー二〇一号に、ぼくはまだ一度もさわらしてもらえない。

朝から雨。午後になっても、雨はまどをあらいながすようにふっている。玉のようなアジサイの花が、おもそうに地面にうなだれていた。

五校時の図画の時間は、いつものように完成した絵を黒板にはって、金銀銅賞をクラス全員の多数決でえらんでいた。

だれの絵が入賞するか、みんなしんけんだ。

まどをしめきった教室の中は、むんむんする。

春夫の絵に、十三人の手があがって十三点。

ぼくの絵の番がきた。つぎつぎ、手があがる。

女子の手も、いつもよりおおいみたい。

（やった！　こんどこそ春夫に勝った。）

と思ったそのとき、先生がこまった顔で、「同点よ。」といった。

けっきょく、ジャンケンで勝ったほうが金賞、負けたほうが銀賞ということになった。

なんということだ！　ぼくはジャンケンに負けてしまった。こんどの絵は、だんぜん春夫より前評判がよかったのに……。

春夫は、ぼくとちがって、せが高くスマートでスポーツは万能。勉強もできる。たんじょう日には、おおぜいの女子をしょうたいしたりする。だから人気があって、女子の点がはいるんだ。

ぼくは、金賞をもらえなかったのがざんねんで、放課後もひとり教室にのこって、かべにはられた春夫とじぶんの絵を、しばらくながめた。
かえりがけ、ひっそりしたしょうこう口に金賞の賞状をもった春夫がにやにや立っていた。
「ユウ、ざんねんだったな。しかたないさ、実力の差だよ。」
「同点だもの、実力だって同じだろう。」
「だっておまえ、いままで金賞もらったことないだろう。せいぜい銅賞だろう。ぼくはこれで三度めさ。きょうのはおまえ、まぐれだろう。」
「なにい！　工作なら、ぼくのほうがじょうずだ。飛行機づくりなら、ぜったい春夫に負けないぞ！」
「だったら何メートルとぶか、きょうそうしようぜ。ユウのつくった飛行機、ほんとにとぶのか？」
ぼくはかっとなって、春夫におどりかかっていった。はげしいとっくみあいになった。
飛行機きょうそうのことは、つぎの日にはもう、クラスじゅうに知れわたっていた。
春夫は、ぼくとはちがって、そうとう高価なもけい飛行機を買うらしい。
（負けるもんか！）

ぼくはさっそく、にいさんと同じグッピー二〇一号の制作にとりくんだ。だがむずかしい。

にいさんの助手をしていたときはかんたんに見えたのに。設計図を見てると、算数の文章題をといてるときみたいに、頭の中がこんがらかる。

主翼の紙にのりをつけすぎてべとべと。

にいさんは手つだってもくれないで、ひどいことをいった。

「へーえ。ユウ、これが飛行機？　へーえ、いっそのこと、もっと大きなタイヤをつけて、地上を走らせたほうがいいよ。」

「なんだい！　にいさんなんか、ぼくと同じ四年生のとき、とうさんにつくってもらった

んだろう！　ぼくだって、とうさんがいきてたら……。」

鼻のおくが、つんつんいたくなった。

くやしいけれど、にいさんのいうとおり、ぼくの二〇一号は、ぜんぜんとばない。すぐついらくだ。

こうなったら、なにがなんでも、にいさんのグッピー二〇一号をかりるしかない。もちろんむだんで。

つぎの朝。野球の早おきれんしゅうにむちゅうなにいさんは、ぼくが顔をあらっていると、もうかばんをかついでげんかんをとびだした。

ぼくはいそいでグッピー二〇一号をさがしにかかった。どこをさがしても、見つからない。

「ええい！　いじわるおにいめっ。」

がらくた箱をけとばしたら習字道具がでてきた。にいさんのわすれ物だ。

とどけてなんかやるもんか！

それから三日め。

にいさんのきげんのいいときに、ぼくは、春夫との飛行機きょうそうの一けんをはなして、ていねいにたのんでみた。

けれども、やはりだめだった。
春夫には、「いつ、きょうそうするんだよう。」と、さいそくされている。でも、あたらしいもけい飛行機を買うには、貯金箱のお金ぜんぶはたいても、まだたりない。にいさんはこづかいをかしてくれそうもないし、かあさんにはたのめない。
ぼくの頭の中は飛行機のことでいっぱいだ。
ただ一つののぞみは、研究会のため休校となる五日後の火曜日だけだ。

火曜日の朝。
にいさんはめずらしく、まだふとんの中にいた。
まどをあけると、どんよりと雲がたれこめて、いまにも雨がおちてきそう。
にいさんの心の中も、きっとくもりだ。なぜって、にいさんは、日赤病院に予約していた、へんとうせんの手術を、午後にするんだ。
ぼくは、じぶんがのどを切られるみたいで、朝ごはんがときどき、のどにつかえた。
かあさんも、そわそわおちつかない。
用もないのに、何回もぼくたちのへやにはいってきて、にいさんに、

「かあさん。パーマのお客さんに、わるいよ。」
といわれては、ドア一まいむこうの美容室へひきかえした。
「ぼくは平気さ。手術は、のどにますいしてやるんだよ。は、は、は……。」
にいさんは、でがけにそういったけれど、顔も目も、ちっともわらっていなかった。
ぼくは、にいさんが病院にいるあいだに、ゆっくりすみからすみまで家じゅうさがして、にいさんのグッピー二〇一号を見つけだして、春夫とどうどう勝負するつもりだった。この日のくるのを、どんなにまっていたか。……なのに、どうしたんだろう。すこしもその気になれない。
ぼくは、もうじっとしていられなくて、美容室にかけこんだ。
「パーマなんか、お客なんか、ほっぽって、にいさんのそばにいってあげて！」
と、どなるつもりなのに、こんなだいじな日にかぎって、お客はいっぱいだ。
かあさんは、ひたいにあせして、うでまくりした白衣の手をいそがしくうごかして、たったひとりでがんばっていた。
いつものにこにこ商売顔はどこへやら、白いひきつったこわい顔。
かあさんも、にいさんの手術のことが、ぼくと同じくらい心配なんだ。

ぼくは、かあさんに気づかれないように、うら口からそっとでて、バス停へ走った。

バスをまっている人に、日赤病院前を通るバスをおしえてもらってのった。

ひとりでバスにのったのがはじめてのぼくは、知らない人の中で、とても心細かった。車内放送だけがたよりなので、からだじゅうを耳にして、じっと立っていた。

バスはこんでいて、そうぞうしい。

「ピーンポーン。つぎは、日赤病院前です。」

ぼくは、はっとして近くの合図のボタンをおそうとした。でも、おとなにかこまれて立っていたぼくは、ボタンに手がとどかなかった。

はやくボタンをおさないとたいへんだ。

「ぼ、ぼく。お、おりまーす！　ボタンに、手が、とどきませーん！」

やっとバスをおりると、日赤病院が見えた。

ぼくは、受付でにいさんの病室をきいて、自動エレベーターのボタンをおした。

おしえられたとおり、ろうかにでて左へおれて三つめのへや。

だが、どうもへんだ。ベッドのかわりに大きなたるが二つ。ふたをずらしてのぞいた。しょうどくえきのにおいが、つーんと、なみだのでるほど鼻をつく。水面に黒いもやもやした毛が

ういている。その下になにか見える。
ぼくは、指先で鼻をきつくつまんで顔を近づけた。……し、し、死体だあ!!
ま冬に、頭からひや水をあびたように、からだじゅうがぶるぶるふるえた。
エレベーターのボタンをおしまちがえて、かいぼう用の死体置場にまぎれこむなんて。
とんでもないこわいめにあってしまった。

病室でにいさんをまっているあいだも、からだのふるえはとまらなかった。
やっと、手術がおわって、にいさんが青白い顔ではこばれてきた。
にいさんは、ぼくを見ると、さいしょおどろいた。が、すぐ、じごくでほとけにあったように、ぽっと明るい顔になった。うれしそうになにかいおうとしたが、すぐくるしそうに顔をゆがめた。
声をだすと、手術のあとがいたむんだ。
かわいそうなにいさん。メスで切ったんだもの、血がどばっとでたんだろうな。
ぼくは、きゅうに鼻とのどのおくがきゅーんといたくなって、目がうるみ、口がゆがんだ。
にいさんは、ぼくを安心させようと、「だいじょうぶ、おれはつよいんだぞ!」というように、うでをまげてポパイのまねをしてウインクした。
「うっ、うう。う、うわあーん!」
家をでてからいままではりつめていたぼくの気持ちは、いっぺんに大ばくはつした。
ベッドの上のにいさんは、あわてて、小さなボストン・バッグから手帳をだすと、なにかかいていたが、シーツをたたいてぼくをうながした。
ぼくは、なきながらベッドによじのぼった。

にいさんは、ここをよんでごらん、と目くばせをした。

> 春夫に負けるな。手つだってやるから、もう一度、グッピー二〇一号をつくるんだ。材料代のたりないぶんは、だしてやる。かわらで飛行のとっくんもしてやる。とうさんがぼくにしてくれたように——。
> な、もうなくな。

ぼくは、にいさんにだきついた。
ベッドがギシギシなった。

オタマジャクシ日記

那須正幹

六月のある朝のことです。高橋先生が、にこにこ顔で教室にはいってきました。

「これは山下さんがかいたオタマジャクシの観察日記です。遠足のとき、田んぼにカエルのたまごがあったのおぼえている？　あのとき採集したたまごを、山下さんは、ずっと飼育していたんです。そして観察したことを日記につけていたの。」

先生が、一さつのノートをみんなに見せました。一ページごとに、色えんぴつの絵と、みじかい文がかきこんであります。

「山下さん、よく観察しましたね。みなさんも、あとから見せてもらいなさい。」

先生は山下さんのせきまであるいていって、ノートをかえしました。山下さんが、うれしそうににっこりわらいました。

先生は、そこでみんなのほうにむきなおりました。
「あのとき、カエルのたまごを採集した人は、おおぜいいたけど、どうしたのかな？　ちゃんとカエルになるまでめんどうみた？」
教室が、ちょっとのあいだしんとなりました。先生は黒板のほうにもどりながら、ことばをつづけます。
「どんな小さな動物にも命があるんです。それを、おもしろ半分に採集しては、かわいそうですね。山下さんみたいに、さいごまでかってやるんならいいけど……。」
鈴木悦子は、だまってうつむいていました。
じつは、悦子も四月の遠足のとき、カエルのたまごを採集したひとりでした。すくったたまごを、ポリぶくろに入れてもってかえりました。ガラスびんで四、五日かっていたのですが、いつまでたってもオタマジャクシにならないので、すててしまいました。
休み時間になりました。クラスのみんなが山下さんのせきにあつまって、ノートを見せてもらっています。悦子は、なんだかつまんない気分がして、せきにすわっていました。
「山下さんのノート、見た？」
親友のユミがやってきました。

「オタマジャクシって、あと足がさきにはえるのねえ。知らなかったわ。あたしも、かってみたかったなあ。でも、だめかなあ。だってさ、カエルになるまでに、四十五日もかかるのよ。山下さん、四十五日も、毎日えさをやったり、水をかえたりしたんだって。すごいと思わない？」

ユミが、ほっぺたを赤くして、ぺらぺらまくしたてます。

「へえ、山下さんのオタマジャクシ、四十五日でカエルになったの。わたしのは、四十三日だから、二日はやかったわけね。」

悦子は、ふと、そういっていました。べつにうそをつくつもりはありませんでした。ただ、あんまり山下さんのことを感心しているユミを、ちょっとからかってやろうと思っただけです。

ユミは、びっくりしたように悦子を見ました。

「まあ、悦子もオタマジャクシかってたの。」

「はなさなかったかしら。」

「観察日記つけた？」

「もちろん。ただ、かうだけじゃあ、つまらないもの。」

悦子は、じぶんでもふしぎなくらい、すらすらとうそをついていました。

「なあんだ、そうならそうと、先生にいえばよかったのに。ねえ、みんな、きいて……。」

ユミがくるりと教室の中央をふりかえりました。

「鈴木さんもオタマジャクシの観察してたんだって。四十三日でカエルになったのよ。山下さんより、二日もはやいわよ。」

ユミの声で、山下さんのまわりにいた子が、悦子のほうをむきました。

「ねえ、悦子も学校にもってきて、先生に見せたほうがいいわよ。山下さんだけ、ほめられるなんて、不公平だもの。」

ユミが、山下さんにもきこえるくらい、大きな声でいいました。

いったい、どうしてこんなことになったのか。悦子は、とうとう、みんなの前で、あし

たオタマジャクシの観察日記をもってくると、やくそくしてしまったのです。

こうなったら、きょうじゅうに観察日記をかいて、もっていくほかありません。

「あんなの、かんたんだわ。足がはえて、手がでたら、カエルになるんだもの。」

悦子は、心の中で、何度もつぶやきながら、家にもどりました。

たまごを採集したのは四月二十日、遠足のかえりです。ぐにゃぐにゃした、とうめいのひものようなものの中に、黒いつぶつぶがならんでいたのをおぼえています。

悦子は、まず四月二十日のページに、たまごの絵をかいて、採集したようすをかきました。

ここまでは、ほんとのことですが、問題はそれからです。たまごは、何日くらいでオタマジャクシになるのでしょう。悦子の計算でいえば、四、五日より、もっとかかることだけはたしかです。

「そうねえ、十日めにかえったことにしよう。」

四月三十日のページに、こうかきました。

〈けさ、水そうを見たら、たまごがわれて、かわいらしいオタマジャクシが十二ひきおよいでいた。わたしは、うれしくてたまりません。〉

そして、小さなオタマジャクシの絵を、十二、黒えんぴつでかきました。

さて、これからオタマジャクシをかうことになるわけですが、なにかえさをやったことにしなくてはなりません。

〈五月一日、きょうから、えさをやることにした。ごはんつぶをやると、ぱくぱくおいしそうに食べました。〉

オタマジャクシは、あと足がさきにはえるのだと、ユミがいっていました。

五月十五日に、あと足がはえたことにして、それらしい絵をかきました。あと足がはえるまで、なんにもかかないのは、へんなので、たまごからかえったオタマジャクシが、一日一ミリメートルずつ大きくなったことにして、毎日からだの長さをかきこみました。

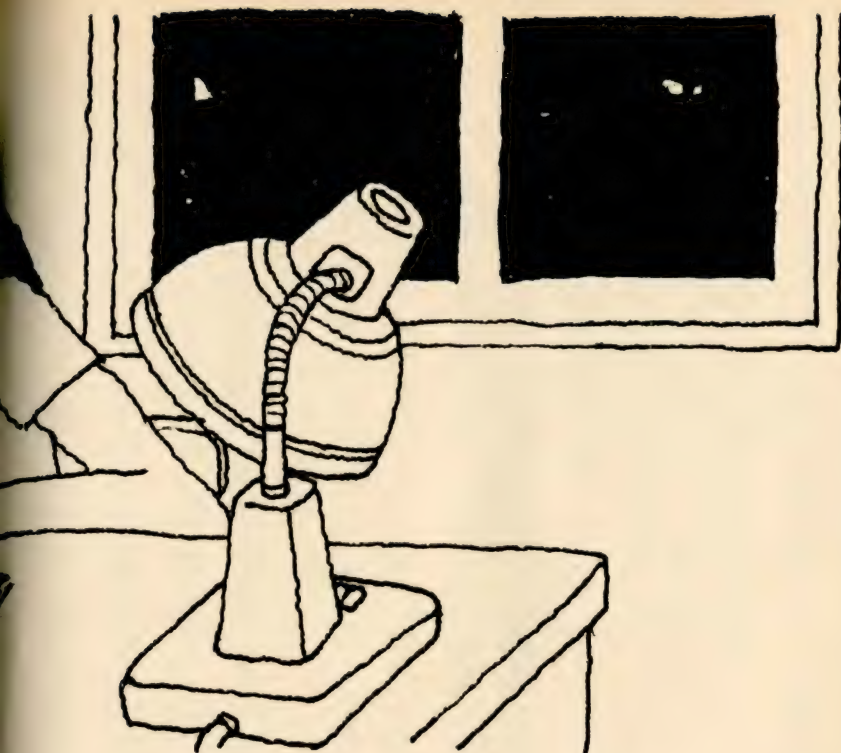
こんどは前足のはえるばんです。

五月三十日に、前足をはやし、六月二日、めでたく十二ひきのカエルがたんじょうしたことにしました。こうすれば、ちゃんと四十三日めに、カエルになったことになります。

と、ここで悦子はふしぎなことに気づきました。

「オタマジャクシのしっぽって、いつ、なくなるんだろう。」

悦子は、何度も首をひねって考えましたが、わかりません。

時計を見ると、もう十時すぎです。きょうは夕ごはんとおふろにはいる時間をのぞいて、ずっ

とつくえの前にすわりっぱなしでした。われながら、よくがんばったものです。

だけど、このしっぽをなんとかしないうちは、せっかくの観察日記も完成しません。

あれこれ考えているうちに、悦子はだんだんめんどくさくなってきました。

「いいわ、しっぽがちょんぎれたことにしようっと。」

六月二日、つまりさいごのページに、悦子は、こうかきました。

〈きょう学校からもどると、どうしたわけかオタマジャクシのしっぽがちぎれていた。そして、カエルになって、ぴょんぴょんとんでいた。わたしは、うれしく

て、ばんざいをさけびました。〉

かいてみると、なんとなく、これでいいような気がしてきました。トカゲだって、しっぽがちぎれることがあります。オタマジャクシも、しっぽがちぎれて、それでカエルになるのではないでしょうか。

よく朝、悦子はノートをもって学校にでかけました。

先生にわたすときは、さすがにどきどきしました。

「まあ、鈴木さんもオタマジャクシを観察していたの。よむのがたのしみね。」

先生が、ほんとにうれしそうにいいま

した。

先生にノートをわたしてしまうと、悦子はまた、しっぽのことが気になりはじめました。そこで、休み時間、山下さんにたずねてみました。

「オタマジャクシのしっぽだけど、あなたのは、いつごろなくなったの?」

山下さんは、ふしぎそうな顔つきで、悦子を見ました。

「いつごろって……。前足が、はえるころから、だんだんみじかくなって、カエルになるころすっかりなくなったわ。」

「だんだん、みじかく……?」

悦子は、顔の血が、すうっとなくなったような気がしました。

そんなことがあるのでしょうか。しかし山下さんは、うそをついているようには見えません。オタマジャクシのしっぽは、しだいにみじかくなって、きえてしまうものなのでしょう。

「どうしよう……。」

先生は、きっとへんに思うでしょう。それどころか、悦子がオタマジャクシをかっていなかったことを見やぶるかもしれません。

つぎの日、先生が悦子にノートをかえしてくれました。
ぜったいしかられる。悦子は、そう思っていました。
でも、先生は、
「よませてもらったわ。ありがとう。」
と、いっただけでした。
先生は、気がつかなかったのでしょうか。それとも、ちゃんとわかっているのに、わざと、なにもいわなかったのでしょうか。
「ねえ、観察日記、わたしにも見せてよ。」
ユミが、しきりにせがみましたが、悦子はノートをかばんの中にしまいこみました。
そう、このノートは、もうだれにも見せるつもりはありません。

「先生、山下さんのときは、あんなにほめたくせに、悦子には、なんにもいわないのね。山下さんのこと、ひいきしてるんだわ。」

ユミが、ちょっと不満そうにいいましたが、悦子はだまっていました。そして、五年になったら、オタマジャクシをかって、ほんとの観察日記をつけてみようかな、と思いました。

ロボの夕やけ

ゆさ　しゅくこ

車が田んぼの中のせまい道にはいると、オッタンは、ぐんとスピードをおとして左手でたばこに火をつけた。赤とんぼがとんできてサイド・ミラーにとまったかと思うと、またスイッとはなれていく。

やがて、左のほうにお寺の杉林(すぎばやし)が見え、赤いかねつき堂(どう)の屋根(やね)がのぞくと、ロボは思わず立ちあがって、かん声(せい)をあげた。

夏休みになっても、オッタンがむかえにきてくれないものだから、ロボは、すっかりしょげかえっていたのだ。友だちはみんな、親(しん)せきや里親(さとおや)といっしょに学園(がくえん)からでていってしまい、きゅうにしずかになったごらく室で、ひとり、ひざこぞうをかかえてテレビを見ているロボのむねは、さびしさでつぶれてしまいそうだったのである。

そこへ、とつぜんオッタンがむかえにきてくれたものだから、ロボはうれしくて、とびあがってしまったのだ。

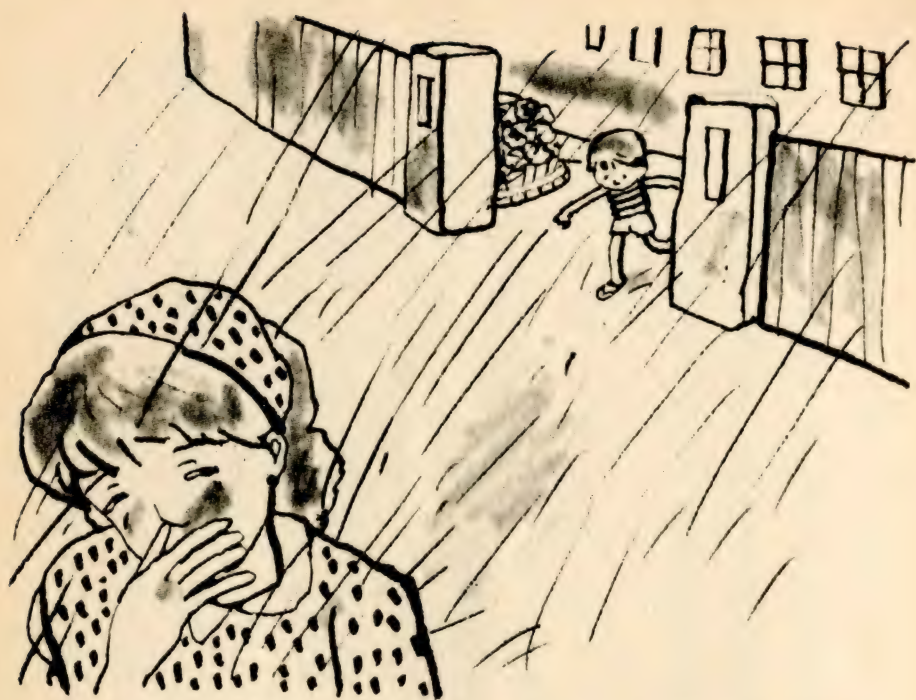
オッタンの車が、お寺の山門わきの坂道を音をたててのぼると、白いエプロンすがたのオバタンと高校生のネエタンが、家からでてきて手をふった。

ロボが、長い休みのあいだこのお寺ですごすようになってから、ことしで三年めである。

ロボのいる仙台の子どもの丘学園は、いろいろなわけで家族といっしょにくらせない子どものための学園である。それでせめて長い休みのあいだだけでも、ふつうの家のくらしをさせたいということで、子どもたちは、それぞれの里親のもとに、ひきとられていくのである。

だからロボは、おおぜいのなかまのいる学園とはちがったたのしみを、オッタンの家であじわうことができるのだ。

ロボが、子どもの丘にはいったのは、一年生の夏だった。ロボはその日のことを、はっきりとおぼえている。

夕立につつまれた学園のうら門を、あとを追ってなくロボから、にげるように走っていったかあちゃんの、雨となみだで、ぐちゃぐちゃにぬれた顔が、ロボの目のおくにやきついてはな

れない。そのとき、まどから見た雨の中のあじさいの花が、どういうわけか、いまも目にのこっている。
　でも、それっきり、かあちゃんは、ロボをむかえにきてはくれないのだ。
　とうちゃんが死んだのは、ロボが三つのときだった。それからのかあちゃんは、小さいロボをつれて、あちこちとはたらいてあるいた。いつも同じ服を着たかあちゃんは、ロボがごはんを食べるのを、じっと見まもっていた。じぶんは、食べなかった。
　五つのとき、あたらしいとうちゃんとすむようになったが、ふだんはおとなしいとうちゃんが、お酒をのむと、べつの人のようにらんぼうになった。

あるとき、かあちゃんをけとばそうとしたとうちゃんの足が、なきながらかあちゃんをかばったロボを、思いっきりけってしまったのである。小さなロボのからだは、アパートの鉄の階だんをころげおち、コンクリートの上にたたきつけられた。さいわい、命はとりとめたものの、ロボの足は、もとのようにはならなかった。

〈ひろし〉という名があるのに、友だちが〈ロボ〉とよぶのは、左足をひきずってあるくようすがロボットににているというのである。

それに、ことばもまのびしていて、ねじのゆるんだロボットのようなのだ。しかし、ロボじしんは、ロボットが大すきなのと、もちまえの明るくのんびりした性格から、「おれは世界でたった一つの、いきたロボットだ。」といって、みんなにいばってみせるのだった。

〈オッタン〉〈オバタン〉〈ネエタン〉というよび方も、四年生になっても、二年生のときのままである。

そのばん、ロボは大きなおならを、何度もして、みんなをわらわせた。なにしろ、ゆでたてのとうもろこしを、一度に三本も食べるんだもの。

ロボがくると、オッタンの家はきゅうににぎやかになる。三年もつづけてきているので、友だちになった近くの子どもたちが遊びにやってくるからだ。

なかでもロボを大かんげいするのは、のら犬のボロである。
三年まえの夏、はじめてこのお寺につれてこられ、友だちもなくしょんぼりしているロボの前に、とつぜんあらわれたのがボロだった。かねつき堂の下からとびだしてきたのら犬は、白い毛がよごれて灰色になり、毛玉のついた長い毛にいっぱい杉の葉をくっつけて、ちょうどボロでもひきずっているように見えた。
土くさいからだをこすりつけ、手をぺろぺろなめるのら犬に、ロボはボロと名前をつけてやった。ボロは、オッタンたちが、びっくりするほどロボになついた。そして、一日じゅう、ロボにくっついていた。ところがロボが仙台にかえると、またいつのまにか、すがたをけしてしまうのである。
ロボは、あしたボロとあえると思うと、うれしくてたまらなかった。

つぎの朝、ロボはオッタンよりはやくかねつき堂にのぼった。お寺の下の田んぼが、青あおと波うっていた。空気があまい。
ロボは、まだひとりでかねをつくことができないので、いつもオッタンのうでにぶらさがってつくのだが、それでもかねをつくのが大すきなのだ。来年あたりは、ひとりでつけるかもし

れない。
遠くの山にこだまするかねの音をきいていると、わかれていったかあちゃんのことが思いだされて、ロボのむねは、じんとなる。
だからロボは、このお寺にいるあいだ、朝と夕方の六時には、一度もかかさずかねをつくのである。
かねをつきおえたロボは、本堂のまわりをあるいた。どこにもボロのすがたはなかった。いつもなら、その日のうちにとんでくるのに、どうしたことだろう。ロボは、ちょっと不安になった。本堂のうすぐらいえんの下をのぞいてみた。たきぎ小屋や、ふるい花輪などのはいっている小屋も見た。どこにもいない。
ロボがすこしがっかりして、かえりかけたときである。
とつぜん、うら庭で犬のなき声がした。ロボは、とびあがるようにしてうらに走った。
しかし、そこにいたのは、ボロとはにてもにつかない、白いふさふさした毛の犬だった。
それはテリアのリリーで、親せきのおばさんが旅行することになったので、あずかっているというのである。
ロボは、それから毎日、リリーの世話をすることになった。さんぽをし、ブラシをかけドッ

グフードに牛乳をまぜてやった。
でもリリーの世話をすればするほど、たまらなくボロにあいたくなるのである。
こうして何日かすぎてしまった朝、かねをつくためにかねつき堂に走っていったロボは、思わず立ちすくんだ。
そこには、いままで、一度も見せたことのない、こわい顔をしたオッタンが竹ざおをもって立っているのである。
声をかけようとしたとたん、オッタンの竹ざおが、すさまじいいきおいでふりおろされ、「ギャーン。」というひめいとともに、灰色のかたまりが坂道をころがりおちた。
——ボロだっ。
ロボは息がとまるようだった。

ロボに気がついたオッタンは、リリーが女の犬であること、雑種のしかも、のら犬のボロを近づけてはならないことを、すこしきまりわるそうにはなしたが、ロボの耳にははいらなかった。ただ、ボロのなき声だけが、いつまでも耳からはなれなかった。
しかし、その後も、ボロは、しょうこりもなくリリーの小屋に近づいては追われるのである。しかも、あんなになかよしだったロボがよんでも、白い目をむいて、かくれてしまうのである。
（しようのないやつだな、おまえは……。）
ロボは、なさけなく、かなしくてならなかった。
いよいよリリーがかえっていくという朝のことだった。ロボは、ボロがかねつき堂の下にかくれているのを、だれにもはなさなかった。せめて、さいごの一日だけでも、リリーにあわせてやりたかったのである。オッタンといっしょにかねをつきながらも、ロボは、ボロが見つからなければいいと、それだけ考えていた。
ところが、どうしたことだろう。いままで、ろくに見むきもしなかったボロが、かねをつきおえ、階だんをおりかけたロボの足に、いきなりじゃれついてきたのである。「あっ。」というまもなく、オッタンの白いはなおのげたがはげしいいきおいでとんだ。
そのとたん、ボロの小さなからだは、もんどりうって、コンクリートの上にたたきつけられ

たのである。
びっこをひきひき、遠ざかるボロのひめいをききながら、ロボは、はじめて声をあげてないた。
(オッタンのバカ、死んじまえ。)
朝ごはんも食べないでないていたロボがいないのを知ったのは、昼ごはんのときである。せみとりのあみも、つりざおも、えんがわになげだされていた。友だちのうちにもいってはいない。おどろいたオバタンが、あちこちに電話をかけたが、だれも見かけないという。
ところが、れいぞう庫の中から牛乳が一本とパン一ふくろ、それにリリーが食べのこしていったドッグフードのかんづめが一かんなくなっているのに気がついたのは、もうすぐ四時になろうというころだった。
オッタンは、十キロばかりはなれた町に車をとばした。これまでに、何度か家出をしたことがあったということをきいている。どこか遠くへいこうとしているかもしれない。
しかし、駅にも、大通りにも、遊園地にもロボのすがたは見あたらなかった。
オッタンは、いよいよ大がかりにさがさなければならないと考え、青ざめながら車にのった。
車はせまい町はずれをすぎ、しばらく雑木林の中を走った。オッタンの耳に、けさのロボの

なき声がきこえてくるようである。

やがて車は、カーブのおおいくだり坂にさしかかった。寺まであとすこし、さいごの大きなカーブをまがると、きゅうに目の前がひらけ、青い田んぼがひろがった。

そのときだ。オッタンは、いきなりブレーキをかけて車をとめた。かねの音がきこえたような気がしたのである。やっぱりかねの音だ。時計を見ると六時三分すぎである。

ところが、そのかねの音ときたら、まったくへんてこな音なのだ。

ゴォオォン、ゴン、ゴォオォン、ゴン。

ものすごくいきおいがいいかと思うと、つぎは、きえいるようによわく、しかも、リズムはめちゃめちゃときている。オッタンの顔に赤みがさした。オッタンは、気もそぞろに田んぼの中を車をとばした。一直線のすなぼこりが車のあとを追っている。

杉林の中から、かねつき堂の屋根が見えた。

そのときである。お堂の下の坂道を、車にむかって走ってくる二つのかげが見えた。二つのかげは、びっこをひきながら、それでもいっしょうけんめい走ってくる。

とたんに、オッタンのほおがゆがんだ。

「いたずらどもォ、心配させたばつとして、今夜からは、もうどこにもやらないからなあ。」

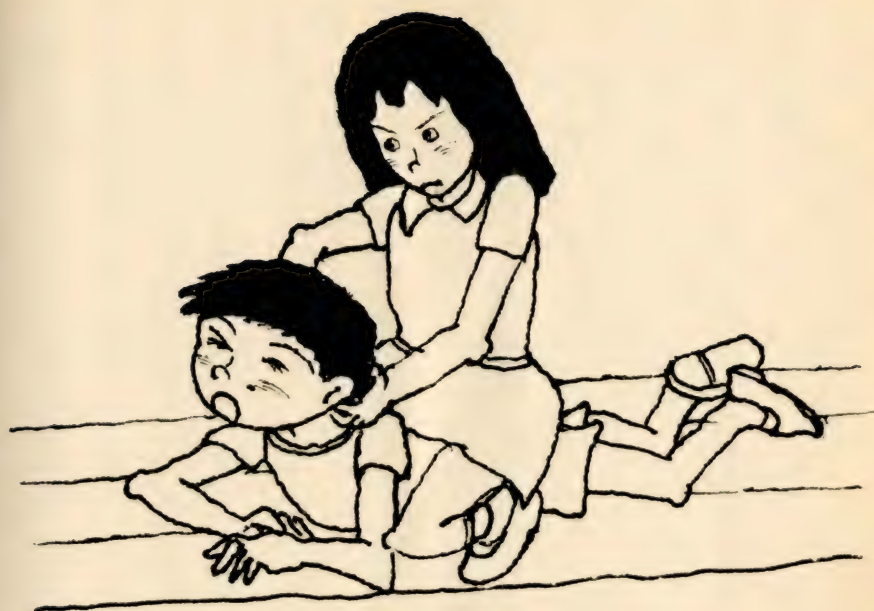
オッタンは、まどから顔をだすと、らんぼうな口調でどなった。

夕やけが、まっかである。赤い夕やけをあびながら、口に手をあててロボがなにかさけんだ。ボロがしきりに、おをふっている。

ユミとイサムはけんか友だち

三田照子

徳島の町なかにある南昭和小学校四年一組で、いちばん人気のある女の子は矢上ユミです。
ユミはせが高く、すらっとしていて、目のぱっちりした色白の美人です。体育は、鉄ぼう、とび箱、のぼりぼう、どれも男の子よりうまくできます。勉強もよくできます。いつテストされても、たいていは満点です。
作文も討論もずばぬけてうまくて、ユミにかなうものはいません。
それだけに、男の子の反感をかいやすいユミです。
ちびだけれど、けんかがつよいところから、〈親分〉と、あだ名のついている松本イサムも、ユミがきらいです。
学校のルールをまもらないイサムは、ユミに注意されてよくけんかをします。

二学期がはじまってまもないある日、イサムは給食まえの手あらいのかえりに、ろうかをつっ走り、ほかの子にぶつかりました。
「この週の児童会のめあては、ろうかを走らないということでしょう。」
と、さっそくユミにやりこめられました。イサムはかっとなりましたが、給食の時間だったのでおとなしくしていました。
給食がおわってイサムは、
「おい、ユミ。つけたい話がある。ろうかへでろ。」
と、いいました。
「話ってなによ、イサム。」
「イサムとはなんだ、なまいきだぞ。」
「あんただって、ユミって、よびすてにしたじゃないの。」
「男と女とはちがうわい。女は女らしくいえ。」
イサムは、ろうかにでながら口をとがらせました。
「男女同権よ。」
「なに！　男女同権なら勝負しよう、かかってこい。」

ことばと同時に一歩さがったイサムは、いきなりユミにダッシュしました。とくいの頭つきです。

ところが、ユミがさっとからだをかわしたので、つんのめったイサムは、ろうかに顔をすりつけてしまいました。ユミはすかさず、イサムのせなかに馬のりになって、両手で首すじをおさえつけました。

たちまち、やじ馬があつまってきました。

「こらイサム、男女同権をみとめるか、みとめんか。」

大きなユミにおさえられて、ちび親分のイサムは身うごきもできません。

「……く、くるしい。手をはなせ。みとめる。」

イサムはゆか板をたたいて、ギブ・アップ

しました。
「ほんとやな。」
ユミがねんをおしたとき、たんにんの桂たけし先生が、
「どないしたんや。」
やじ馬をおしのけて、のぞきこんだので、
「プロレスごっこです。」
ユミはすまし顔で答えて、手をはなしました。でも、桂先生はプロレスごっこでないことを、ちゃんと知っていたようです。にやにやしながらいいました。
「親分、かたなしだなあ。」
桂先生がいってしまうと、ユミはイサムにいいました。
「また、いつでもあいてになってあげる。」
イサムは、首をおさえて、まだくるしそうでした。それでも負けおしみをわすれません。
「こんどは手かげんせんぞ。」
と、ユミをにらみました。

*

それから一月ほどたちました。
土曜日の夕方、イサムが病気のおかあさんのくすりをもらいに山野病院へいくと、受付のところで、ぱったりユミにあいました。
知らぬふりをしているイサムに、ユミがはなしかけてきました。
「おかあさんのぐあい、どう？」
学校でのユミとちがって、女の子らしいユミでした。イサムはてれくさくて返事ができません。くすりをうけとると、そのまま外にとびだしました。
つぎの月曜日。イサムがいつもの時間に教室へはいっていくと、男の子と女の子があちこちにかたまってはなしています。
「ユミのやつ、急性じん炎とかいう病気になって、入院したんやと。」
「女らしくない、なまいきなやつだけど、病気ときいたらかわいそうやな。」
そんな会話を耳にして、イサムははっとしました。
(土曜日の夕方、山野病院であったが、あれは病気でみてもらいにいっていたんやな。いやにおとなしいと思ったら、やっぱり……。)
ユミのいない四年一組の教室は、さびしくなってしまいました。クラスのしんぼうがぬけて

しまったようで活気がありません。
イサムも、おとなしくなってしまいました。
ユミが学校をやすむようになって三か月たちました。秋の運動会のこうふんがやっとおさまったころ、ユミはようやく学校へでてきました。桂先生のうしろから教室にはいってきたユミを見て、イサムはあっと声をだしそうになりました。おもながだったユミの顔はまるくふくらんで、青黒くひかっていました。スタイルもだいなしです。みんなは、じろじろユミを見ているだけでした。
「ご心配をおかけしました。またよろしく。」
と、ユミがあいさつしたので、女の子が四、五人、ユミのそばによっていって、長いことつかわなかったつくえの中をふいてあげたり、かばんをかたづけてあげたりしました。
「ユミって、ようこえてしもうて、なんやべつの女の子みたいやなあ。」
「ぶさいくになったみたいや……。」
授業がはじまってからも、教室はざわざわしていました。
「しずかに。」
桂先生が大声でいいました。それから先生は声をおとして、

「ユミちゃんがふとっているのは、くすりのせいなんだ。長い病気のあとだから、みんなで気をつけてあげような。」
「はーい。」
みんな、いい返事をしました。イサムは、
「ユミとけんかができんのか。つまらん。」
ひとりぶつぶついっていました。
ユミは、その日からはりきって学校へでてきました。けれど、いく日かすると、しょんぼりしはじめました。
ユミは体育も勉強もできなくなっていたのです。いままでかるがるとんでいたとび箱がとべなくなりました。のぼりぼうも一メートル半ぐらいのぼるのがやっとでした。徒競走だって、からだがおもくて思うように走れません。びりっこです。息もきれてくるしそうにしていました。
「おい、女よこづな。」
と、イサムにからかわれても、いまはいいかえす自信も勇気もありませんでした。つらそうにうつむいているだけです。

せいせきがおちたことも、ユミには大きなショックでした。みんなより三か月おくれたこともありますが、それよりか、がんばる体力がなくなっていたのです。それなのに、

「ユミちゃんたら、きょうの算数のテスト六十点よ。」

おしゃべりウタ子にいいふらされました。

「ユミちゃんはな、このあいだの国語のテストだって七十点だったわよ。」

女の子たちが、大きな声でいいました。

ユミは三学期にはいると、気分がわるいとか、頭がいたいとか理由をつけて学校へいくのをしぶりました。ある朝、ユミはまた気分がわるいといいだしました。

それをおかあさんがしかって、むりやりにおくりだしました。ユミはその日、ふつうの時間に家にかえってきました。

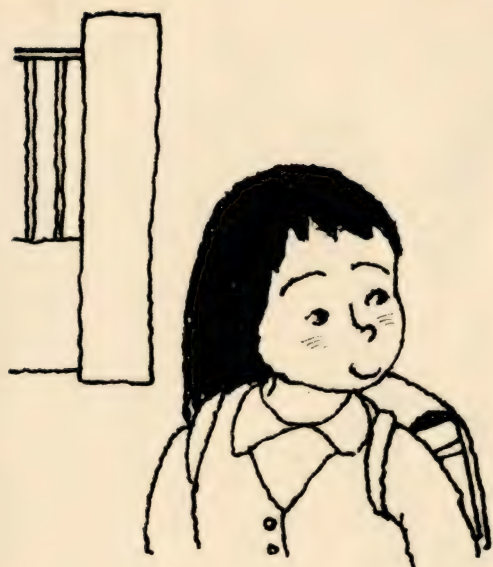
ところが、夕方、桂先生から電話があって、ユミが学校へいかなかったことが、おかあさんにわかってしまいました。おかあさんはおどろいて、ユミにいいました。

「学校やすんで、どこへいっていたの。」

「公園。」

ユミは顔色もかえないで答えました。
「まあ！　公園でなにしていたの。」
「ベンチにこしかけて、ぼんやりしていた……。」
「あんなところで、さむかったでしょう。」
「ううん、さむうなかった。」
ユミは小さく首をふりました。
「ようまあ、ゆうかい魔につれていかれなかったもんね。」
「……。」
ユミは、顔をふくらませてうつむいていました。
(おかあさんは、わたしの気持ちなんか、なにもわかってないんだ。)
桂先生から、あまりしからないようにという注意があったので、おかあさんはそれいじょういいませんでした。
その夜、おかあさんはねむれませんでした。
ユミがあれこれ理由をつけて学校をやすむようになってから、十日ほどたった土曜日の午後

でした。クラスの女の子が三人、ユミをみまいにたずねてくれました。おとなしいマキとヤエとマリです。
へやでマンガをよんでいたユミは、いっしゅんあわてました。きゅうにからだがかたくなってきました。
「みんなにあうの、いや。」
ユミは、おかあさんにつんとしました。でも、ほんとうはうれしかったのです。
「どんなん。」
マキたちがへやにはいってくると、ユミはかたをすぼめてはずかしそうにしました。おかあさんがいなくなると、ケーキを食べながら三人はきゅうにおしゃべりをはじめました。ユミはだまってきいていました。
「なあ、ユミちゃん、はようなおってでておいでよ。」
マキがいうと、ヤエが、
「あさってからこられんの。」
こんどはマリが、
「あんたのけんかあいてのイサムくんだって、あんたをまっとるわよ。なあマキちゃん。」

マリはかた目をつむりました。
「それ、ほんまよ。きのうのことだけど……。」
このごろイサムがとても元気がなくてへんなので、
「けんかあいてのユミがいないから、さびしいんでしょう。」
と、マキがききました。
「ちがうよ。」
イサムの顔が赤くなりました。横にいたヤスオが、
「あんななまいきなやつ、クラスにいないほうがいいよなあ。」
と、イサムの顔をのぞきこみました。するとイサムが、
「おまえ、それでも男か。」
にぎりこぶしで、ごつん、ごつん。ヤスオが頭をかかえてにげだすまでやりました。
ユミは目をかがやかせて、マキの話をきいていました。
「わたしら、これから塾にいくけん、しつれいするわ。あっ、わすれるとこやった。イサムくんから、手紙をあずかってきたんや。」
三人がかえるとすぐ、ユミはイサムの手紙をあけました。メモ用紙に、

〈はよう　でてこいや　つまらんで。
はよう　けんかが　できるように
ならんかなあ。
　　　　　　　　　　　　イサム〉
と、かいてありました。
ユミはきゅうに、学校へいきたくなりました。
心配してくれているイサムにあいたくなったのです。
月曜日、ユミは学校へでかけました。校門の近くまできたとき、
「おーい。」
と、うしろで男の子の声がしたので、ユミがふりむいてみると、イサムが追いかけてきていました。イサムは息をはずませて、
「もうなおったんか？」

てれくさそうにききました。
「うん。もうやすまんでくる。手紙、ありがと。」
ユミも、はずかしそうにうなずきました。
「ユミ。またけんかしような。こんどは負けないぞ。はようけんかができるようにならないかんぞ。」
「うん。がんばる。」
ふたりは、はなしながら校門をはいっていきました。校庭のウメの花が、ぽっちりさきはじめていました。

四年生のプレゼント

市川栄一

いつもは、いかめしい顔の校長先生が、きょうは、めずらしくにこやかな顔で、朝礼台にのぼりました。春休みがおわって、新学期がはじまった日のことです。

「これから、おめでたいお話をします。こんど小山先生がけっこんされて、小川先生になりました。みなさん、小川先生に、おめでとうのはくしゅをおくりましょう。」

子どもたちは、小川先生のほうをむいて、いっせいにはくしゅをしました。小川先生は、はずかしそうにうつむきました。でも、とてもしあわせそうに見えました。

「小山先生――じゃなかった小川先生。おれにひみつでおよめさんになっちゃうなんて、ずるいよ。」

いたずらにかけては、学校じゅうで有名な元三が、教室にはいるとすぐ、口をとがらせてい

いました。
「先生がけっこんするのに、いちいち元三くんのゆるしをうけなくちゃいけないの。そんなきまりはないことよ。」
小川先生も、負けずにいいかえしました。
先生は、三年生だった元三を、三月までたんにんしていたのですが、四月からもひきつづいてうけもつことになったのです。
ですから、おたがいに、気心が知れています。なかよしの友だちどうしみたいに、なんでもいいあえるのです。
それにしても、三年生のころの元三は、いうことをまったくきかない子で、先生をとてもてこずらせました。
友だちをいじめてなかす、先生に平気で口答えをする、あばれてまどガラスを何まいもわる、そうじをさぼる、そして勉強はふねっしん……元三のわるい点をかぞえあげたら、きりがありません。
でも、元三は、絵をかくことがすきで、なかなかじょうずでした。
図工の時間には、元三の目にかがやきがありました。にわとりの絵が、てんらん会で入選し

たこともあります。
先生も絵がすきなので、ねっしんに絵をかく元三に、ときどき、いいヒントをあたえていました。
元三は、毎日のように口答えをくりかえしていながらも、じつは先生がすきでした。
「小川先生のだんなさんて、カッコイイ？　先生は、レンアイけっこん？」
元三が、ずけずけとたずねます。
「元三くんて、おませね。そんなこと、どっちでもいいでしょ。元三くんも、四年生になったのだから、そんなよけいなことにとらわれていないで、さ、勉強、勉強！」
小川先生は、元三の質問を、さっとかわしてしまいました。
「ごまかすのなら、いいさ。この元三たんていさまが、みごとにナゾをといてみせるからね。」
その日の放課後、元三は、校長室のドアをノックしました。
「校長先生、質問があります。」
「どんなことかね。いってみなさい。」
校長先生は、めがねをちょっとずらせて、じろっと元三を見ながらいいました。
「小川先生のだんなさんは、ハンサムですか？　それから、小川先生は、レンアイけっこんで

すか？」

「ばかもの！」

とつぜん、校長先生の大声が、へやじゅうになりひびきました。

「おまえも、もう四年生になったはずだ。そんなことを考えているひまがあったら、もっと勉強をしなさい、勉強を！」

さすがの元三も、びっくりして、家へにげかえりました。

元三の家は、さかな屋です。とうちゃんは、いつも頭にねじりはちまきをしめて、ぴかぴかのほうちょうでさかなを切っています。

「とうちゃん。小山先生は、こんど小川先生になったんだよ。」

「へええ。山が川になったのかい。どうして

かな。」
「にぶいな、とうちゃんは……。先生はけっこんしたんだよ。」
「そうか。けっこんしたのか。それは、めでたい。」
とうちゃんは、手さばきよく、まぐろを切りながら、受け答えをしています。
「あの先生は美人だから、きっと、きれいなかわいいおよめさんになっただろうね。」
前かけすがたのかあちゃんが、横から口をだしたので、元三は、ここぞとばかり、
「もちろんだよ。」
と、力を入れていいました。
「ところで、とうちゃん。小川先生のだんなさんは、ハンサムかな。先生は、レンアイけっこんかな？」
とうちゃんなら、元三がまんぞくする答えをだしてくれると思ったのです。
ところがです。元三のきたいは、みごとにうらぎられました。
「子どもは、そんなよぶんなことを考えなくてもいい。元三も、四年生になったんだから、すこしは勉強をしなさい、勉強を！」
おとなは、みんなきまったように、〈勉強、勉強〉というのです。

元三はくやしくなって、家をぬけだしました。そのへんを、あてもなく、ぶらぶらあるきまわりました。

すると、ある写真屋さんの前にでました。

ウインドーには、写真がいっぱいかざってあります。どれもみな、けっこん記念の写真です。

元三は、すいよせられるように近づいていって、写真をながめはじめました。目が、ちらちらします。
しばらく見ているうちに、元三はドキーンとしました。
「あっ、小川先生だ。小川先生がいた！」
そうです。それは、小川先生のけっこん記念の写真だったのです。
だんなさんは、男らしくて、せが高く、しかもなかなかの美男子でした。
小川先生は、まっ白なウエディング・ドレスを着ていて、おおぜいのおよめさんの中で、おせじでなく、いちばん美人でした。
おまけに、ふたりは、気持ちがぴったりあっている感じなのです。これなら、ぜったいレンアイけっこんにまちがいありません。
そのばん、元三は、おそくまでかかって絵をしあげました。もちろん、写真と同じように、美人の小川先生がハンサムなだんなさんと、なかよさそうにならんでいる絵です。
つぎの朝、元三は、授業がはじまるまえに、職員室の小川先生のところへとんでいきました。手には、くるくるとまるめた画用紙をもっています。
「小川先生のだんなさんは、ハンサムだね。おれ、写真屋さんのウインドーで、写真を見ちゃっ

たんだ。それから、先生は、レンアイけっこんにまちがいなしだね。」

「元三たんていさまにあっては、かなわないわ。」

「はい、これ。花の木小学校四年生、大田元三たんていからのプレゼント。」

元三は、ちょっとあらたまって、小川先生に絵を手わたしました。

画用紙をひろげたとたん、小川先生は、とてもかんげきしてしまいました。

「あら、元三くん。先生を美人にかいてくれて、ありがとう。この絵、ありがたくいただいておくわね。そのうち、先生の家にいらっしゃい。絵のお礼に、なにかおいしいものをごちそうしてあげるわ。」

小川先生にしょうたいされた元三は、とてもしあわせな気分になってきました。
それといっしょに、ふっと思ったのです。
(小川先生をてこずらせるのは、もうそろそろやめなくちゃあ。なにしろ、おれも、四年生だもんな。)

四年のあの子は宇宙人

佐藤晶子

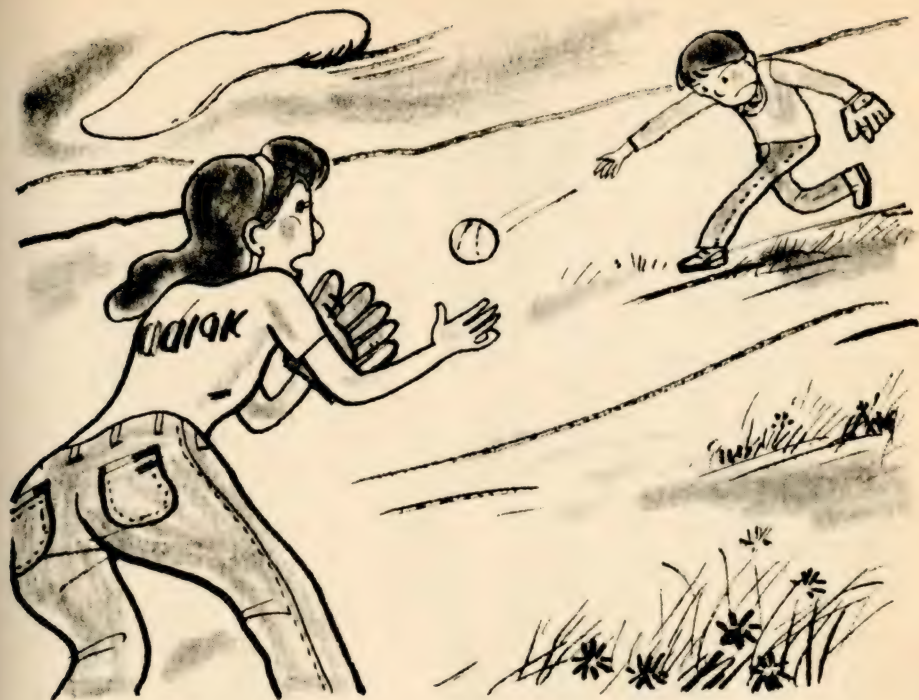
「あいたあ！」

はらだちまぎれにけった石は、ことのほか大きくおもくて、周は思わず顔をしかめました。

（きょうはまったくついてない。）

国語の時間は漢字帳をわすれる。理科の実験の時間はビーカーをわる。とくいな体育の時間さえ、ふみきりをふみちがえて、とび箱からおちたのです。

それというのも、原因はおかあさんにありました。周はおかあさんとふたりぐらしです。おとうさんは周が五つのときに交通事故でなくなりました。それいらい、おかあさんはスタイリストという仕事をしながら周をそだててくれていました。

周のおかあさんは、友だちのおかあさんにくらべれば、ずいぶんちがっていました。お料理、

そうじ、せんたくはまるでだめ。けれどキャッチボールはすごくうまいのです。休みの日、ジーパンをはいてキャッチボールをするおかあさんは、どう見ても周のおかあさんには見えません。でも、周はこんなおかあさんがすきでした。おかあさんとふたりの生活にまんぞくしていました。そしておかあさんもそうなのだと思っていました。

それが、けさのことです。トーストをかじりかけた周に、おかあさんはいいました。

「あのね、周。おかあさん、けっこんしてもいい？」

「けっこんて、おかあさんが？」

「周がいやというならやめるけど、周だっておとうさんができればうれしいでしょう。」

周の心をさぐるような目つきで見ています。周はむねがドキドキしてきました。
「きょうは日直だから、はやくいかなくっちゃ。」
その目をさけるように、ショルダーバッグをつかむと、いそいでアパートをとびだしました。
「周ちゃん、気をつけて。きょうはおかあさんおそいから、夕食はひとりで食べてね。」
あとからおかあさんの声がきこえてきました。
こういうわけで、学校にいるあいだじゅう、周はそのことを考えていて、しっぱいをやらかしたのです。周の心の中は、
（どうしておかあさんはけっこんしたい、なんていったんだろう。）
そればかりをくりかえしていました。それは周だって、おとうさんがいたらと思ったことはあります。だけど、あたらしいおとうさんができたらそれでいい、という気持ちにはなれませんでした。
おとうさんとすごしたのはたった五年間でしたが、周は、周をだきあげた太いうでも、周をのせた広いかたも、たばこのにおいもしっかりおぼえていました。
（おかあさんのばかやろう！）
目の前がぼやけてきたので、周はあわててまばたきしました。

「おまえ、見かけない顔だな、何年生だ。なんだってこんなところでうろうろしてるのさあ。」

という声に目をあげると、二組のガキ大将が子分をひきつれて、ひとりの女の子をとりかこんでいるところでした。女の子の赤いランドセルをゆさぶったり、かみの毛をひっぱったりするので、女の子はいまにもなきだしそうです。

こんなところを見て、ほっておけないのが周の性格です。

「やめろよ！　よわいものいじめは。」

いらいらしていた気持ちがばくはつしました。

「やばい！　三組の竹田だぜ。」

けんかのうでては、周はちょっと名が知られていたので、ガキ大将たちは、なにやらすてぜりふをわめきながら走りさりました。女の子が近づいてきて、

「ありがとう、周くん。」

と、ぺこりと頭をさげました。

「なんでおれの名前知ってるんだ。」

周がそういうと、くすくすわらいながら、周のショルダーバッグの名ふだを指さしました。

（そうか。それにしても、さっきはなきそうな顔をしていたのに、まったく女の子って……。）

すこしあきれた気持ちになりました。

（きょうはおかあさんはおそいんだ。友だちは塾だし。）

そう思うと、アパートへむかう足どりはゆっくりになります。本屋の店先でマンガを立ちよみして、おかし屋でラムネを買いました。ついでに、おもちゃのはんばい機にお金を入れてカプセルをとりだしました。こんな日には、いつもおかあさんがいけないといっていることを、ぜんぶやってやろうと思うものなのです。

でも、さっきからだれかに見られているようで、あとをふりかえると、さっきの女の子がじっと周を見ているのです。

「なんだよ。なにか用があるのか。むこうへいけよ。」

それでも女の子はついてくるのです。

「いけったら！」

こぶしをふりあげると、女の子はにげだしました。あとを気にしながらあるいていくと、さきまわりしたのか、こんどはずっと前の電柱の下に立っています。周が児童公園にはいり、ブランコをこぎだすと、ちゃっかりとなりのブランコにこしをおろしました。あきらめて周はいいました。

「おまえだれだ。何年生？」
「四年一組、杉村ゆかり。あなたは竹田周くん、四年三組、学級委員、とくいな科目は体育。すきな食べ物はカレーライス。」
せは小さいけれど周と同じ学年だというのです。でも、こんな子、見たこともありません。女の子はいたずらっぽくわらって周を見ました。そして、はずみをつけて大きくブランコをゆらしながらつづけました。
「ドウシテッテオモッテイルデショウ。ワタシハ、ナンデモシッテイルンデス。ダッテ、ワタシ、チョウノウリョクヲモッタ、ウチュウジンデスモノ。」
（それにしても宇宙人とは……、頭がおかしいのかな。）
「それじゃ、おまえのおかあさんも宇宙人か。」
「おかあさんはいないわ。」
ふいにゆかりが顔をくもらせたので、周はいじわるをいったことをこうかいしました。それでも、ゆかりはすぐもとの笑顔にもどって、
「周くんのおかあさんはどんな人、やさしい？」
とききました。

「おかあさん、おかあさんなんてばかやろうだ。」
周は思わずさけんでしまいました。ゆかりがふしぎそうな顔をしています。すると、いままでむねにつかえていたものが一度にふきだして、思いもかけず、周ははじめてあったゆかりに、おかあさんのことをはなしていました。だまってきいていたゆかりは、
「周くん、ケンカはつよいけど、あまえんぼうなのね。おかあさんをとられたくないのね。」
まるでおねえさんみたいなことをいいました。
「うるさい！　宇宙人なんかにわかるか。」
かっとなった周は、ブランコをとびおりると、うしろもふりむかず走りだしました。
かぎをあけて、くらいへやにはいる。このしゅんかんが、周はいちばんきらいでした。それでも夏が近づいたせいで日が長く、家の中はほんのりうすぐらいだけで、いくぶんさびしさをやわらげます。
キッチンの黒板には、
〈あたためて食べること。サラダはれいぞう庫の中。宿題ちゃんとすること。〉
と、いつものおかあさんの伝言があり、テーブルには夕食がのっていました。
食事なんて食べる気がしなくて、周は、たたみにごろりと横になりました。あけはなしたま

どから、夏のはじめのあたたかさをふくんだ風がふきこんできます。風が、かべにつるしたおかあさんの花がらのワンピースをカタカタとゆらしました。
(そういえば、おかあさん、このごろとてもたのしそうにしていたっけ。)
めったにスカートをはかないおかあさんが、このワンピースを着て、
「周、どう?」
そういって、くるくるまわっていたすがたを思いだしました。
「周くん、あまえんぼうね。おかあさんをとられたくないのね。」
ゆかりのことばが耳の中でおどります。
(ちがう。ぼくはただ死んだおとうさんが……。)
でもそうでしょうか。周はふと、おかあさんのことを考えていないじぶんに気がつきました。
(いつも周のことだけ考えているおかあさん。どんなときにもにこにこしているおかあさん。でも、おかあさんだって、つらいとき、さびしいときがあるのかもしれない。一つくらいおかあさんのすきにしたって……。)
そこまで考えると、なんだか心の中のもやもやは、すこしずつはれていくようです。ゆかりにもわるいことをしたような気がしてきました。

（あやまろう。）

学年名簿をとりだして電話番号をさがしました。

（たしか一組といっていたはず。）

さ、し、す、ないのです。ああ、あの子はほんとうに宇宙人だったのでしょうか。

「周ったら、ごはんも食べないで、まどをあけっぱなしでうたたねしてるなんて、しようがないわねえ。」

おかあさんの声で周は目をさましました。

「ほら、ケーキのお、み、や、げ。」

ケーキの箱を、周の鼻先につきだしました。

おかあさんとふたりでむかいあって、ケーキを食べはじめると、周はテーブルの下で、そっとおかあさんの足をつつきました。

「おかあさん、けさの話。けっこんしてもいいよ。」

「ほんとう、ありがとう。」

おかあさんはうれしそうにそういうと、じぶんのケーキのいちごを、周のケーキの上にのせました。

つぎの日曜日、おかあさんがけっこんしたいという人と、その人の子どもが周の家にくることになりました。おかあさんは、朝から、そうじをしたり、料理をつくったり、てんてこまいです。

「ピンポーン。」

ブザーがなって、周がドアをあけると、

「杉村です。」

ひげづらでわらっている大きな男の人と、そのうしろからピョコンと顔をだしたのは、なんと、あの宇宙人でした。

かなしかった雲

たかはし　ひでお

四年一組の教室の半分ぐらいに、冬の日があたたかくさしていた。
「まぶしい、だれだ。」
ろうかがわのせきの新一が、目のところを手でかくしながら、まどのほうを見た。
弘が、かがみで新一の顔をてらしたのだ。でも弘は、かがみを手の中にかくすと、前をむいてすましている。
弘は、三時間めの理科でつかったかがみをしまわずにあそんでいる。まどがわの弘のせきからは、どこへでも光をうごかすことができた。
弘は、新一に気がつかれてしまうと、女の子の中でもいちばんおとなしい道子をてらした。
道子はあたたかくなったほおにすぐ気がついて、弘のほうをちょっと見て、ろうかのほうを

むいてしまった。
弘は、ろうかがわのせきをひとりずつてらしていった。
てらされたものは、ふりかえって、弘をにらんだり、もんくをいったりしていた。弘は、気がつくのがおそいと「にぶい。」といってからかった。
弘のいたずらを見ていた伸夫や、武男も一度かばんに入れたかがみをだして、弘のまねをはじめた。
弘は、よう子をてらした。
「うるさいわね、やめてよ。」
よう子は立ちあがって、どなった。
「おう、こわい。」
弘は、かたをすぼめてみせて、かがみをつくえの上においた。
武男と伸夫は人の顔はてらさないで、金魚ばちをてらしたりしていたが、そのうち、ふたりで光の追いかけっこをはじめていた。
弘は、武男と伸夫の光にきょろきょろしているヒロミを見つけると、光を顔にあてた。
ヒロミは目だけをまぶしそうにしていたが、いっしょうけんめいに顔を両手でなでて、かゆ

がっているみたいだ。

ヒロミは、ちえおくれだった。

ヒロミは、いつでもわらっていて、いつもきょろきょろしていたり、となりの孝にはなしかけたりしていた。

それでも、授業ちゅうは、谷中先生のいうことをきいてせきをはなれることはなかったが、先生が問題をだして、できた人は手をあげてというと、ヒロミも手をあげた。

「ハイ、ハイ、ハイ。」

と大きな声でいいながら何回も手をあげた。

谷中先生があまりヒロミをささないでいると、先生のつくえまでいって答えをいった。

「ハイ、サンです。」

赤ちゃんみたいな声で答える。なんの問題でも同じ答えだ。
谷中先生は、
「ハイ、よくできました。」
といって、ヒロミの頭をなでてあげる。
ヒロミはみんなのほうをむいて、にこっとしてから、いそいでせきにつく。
せきについたヒロミは、となりの孝に、
「よくできましたって。」
赤ちゃんみたいな声でいって、にこにこしている。
孝はもうなれてしまっていて、にこにこしながらきいてやる。孝はヒロミがよろこんでいるとき、いっしょによろこんでやった。
ヒロミは孝のいうことをよくきいた。

弘のてらした光が、ヒロミの顔から、ヒロミのつくえの上にいった。
ヒロミは両手でおさえようとした。
光が孝のつくえの上にいった。

ヒロミは、孝のつくえに両手でバターンと音をさせて、つかまえようとしていた。

「ハッハッハ、とる気になってる。」

弘はヒロミが光をうさぎでも追うようにしているのがおかしかった。

弘は、ヒロミの顔をもう一度てらすと、すぐ黒板に光をあてた。

ヒロミは、顔にあたると手で顔をなでて、黒板に光がいってしまうと、目をうごかしてさがした。

弘は二回くりかえした。

ヒロミは、顔にきた光が黒板にいったのに気づいた。

ヒロミはせきを立って、黒板にいった

光を追いかけた。
弘は、すわったままヒロミを黒板のはじからはじまで走らせることができた。
「おい、ヒロミが追っかけてるぞ。」
と、武男が伸夫にいって、光を黒板にあてた。
光が三つになった。
ヒロミはいそがしくなった。おさえたと思うと光は天井ににげた。にげたと思うとまた黒板にあらわれた。むこうにもこっちにも光はあった。
教室のみんなが黒板を見ていた。ヒロミが走るたびに、わらっていた。
「ヒロミ、あっち、あっちへいったぞ。」
「ヒロミちゃん、はやく、こっちよ。」

男の子もはやしたてた。女の子もはやしたてた。ヒロミを走らせてはわらっていた。
よう子もヒロミを見ていた。でも、わらわなかった。
（みんなはどうしてわらえるのだろう。）
よう子はわらっているみんながこわくなった。
よう子は身ぶるいするほどからだに力がはいって、からだがあつくなった。
ヒロミは、あせをかきながら追いかけている。かみの毛があせでひかっている。
「みんな、やめてよ。」
よう子は、立ちあがってどなってしまった。そして、弘や伸夫や武男を見た。
みんなのかけ声はとまった。
弘と伸夫は、よう子のほうを見なかった。まだやめない。黒板にある光をぐるぐるまわしはじめた。
「やめてったら、やめてよ。」
よう子が声を大きくしていった。
「なんでやめんだよ。」

弘が、おこっていった。
「なんでって、ヒロミちゃんがかわいそうじゃない。」
「バカヤロ、なんでかわいそうなんだよ。よろこんでるじゃねえか。」
「そうだ、そうだ。」
男の子たちが弘をおうえんした。
「だって——。」
よう子は、なんていったらいいのかわからなかった。すわって下をむいていた。目があつくなってきていた。
「なにが、だってだ。」
弘が、かがみをもちなおしていった。
ヒロミは、伸夫の光だけを追っていた。伸夫はヒロミの顔にあてた。チョークのこなで白くなった手で、ヒロミは顔をなでた。けしょうしたみたいな顔になった。
男の子たちがまたわらいだした。
伸夫が、よう子のほうをむいて、
「だって、だって、だって。」

と、へんな声をだして、よう子のまねをした。

また、弘たちは、光をぐるぐるまわした。

ヒロミは、つかれたのか、じぶんの近くにこなければ、つかまえようとはしなかった。でもたのしそうに、光のあたったところをバタン、バタンとたたいていた。

そのときだった。

教室の入り口の戸があいた。

ガラッガラッドーン。

大きな音だった。戸がはねかえって、しまりかけた。

孝がはいってきた。

孝は、ヒロミのそばによると、ヒロミの手をひいた。

「谷中先生がくるよ、せきにかえろうね。」

孝の声も、手もふるえていた。

ヒロミは孝に手をひかれてせきにむかった。あるきながら黒板のほうをふりかえっていた。

孝は、さっきまでせきについていた。よう子と同じように、大きな声でいって、やめさせよ

うと思った。でも、いえなかった。弘や武男や伸夫がこわかったのだ。
そして、よう子のほうがさきにいってしまった。
孝はそれでも弘たちがやめないので、教室のうしろのほうからぬけだしたのだ。
ヒロミが走らされているのを、見たくなかった。
孝は、教室の前の戸のところで、わらい声をきいた。そして戸に手をかけた。目をつぶって思いきって手に力を入れた。

ヒロミがせきについた。
教室はしずかになった。
弘はしらけてしまって、かがみをつくえの

上においた。伸夫もつくえの上においた。光だけが教室の天井にあった。
みんなの目が孝のほうにあつまった。
孝はつくえの上に手をおいたまま、前をむいていた。息だけがハアハアいっている。
ヒロミは、まだきょろきょろして、すぐ天井にある光を見つけた。
みんなヒロミにつられて、天井に目をやった。
天井の四角い光が、だんだんまるくなって、くらくなっている。
伸夫の光も、ろうかがわの天井にあった弘のも、くらくなってなくなってしまった。
みんなの目が、教室の外の空にいった。よう子も孝も、まどの外を見た。
灰色の雲が、まわりだけを白くひからせてながれていくのが見えた。

大みそかは三人で

倉持正夫

大みそかの午後。
ひろしとあきらは、近くの小学校の庭でたこあげをしました。
どちらのたこも、糸をぴいーんとはって、冬の青い空にうかんだまま、まるで時間がとまったようにじっとしています。
「お年玉もらったら、糸買わなくちゃあなんねえな。」
ひろしがぽつんといいました。いいながら、目はたこを見あげたままです。
「うん、ぼくも。いくときはいっしょにいこうよ、ひろしちゃん。」
あきらはそういってから、あたりがきゅうにうすぐらくなったのに気がつきました。しかしおとなしいあきらのことですから、「かえろうよ。」とひろしにはいえません。

西の空がまっかになったのを見て、とつぜんひろしが大声をだしました。

「いけねえ、大みそかのそば買うのわすれちまった。とうちゃんにたのまれたのに。」

ひろしはあわてて、糸をぐるぐるまきはじめました。それにつられて、あきらもまきはじめました。

たこがだんだんと大きくなります。

やっと手元(てもと)までたこがくると、ひろしはかけ足で家のほうへすっとびました。あきらがそのあとを追(お)いかけます。

家から大きなさいふをもってきたひろしは、ストアにとびこみました。

「おそばない、おばさん、二つだけど。」

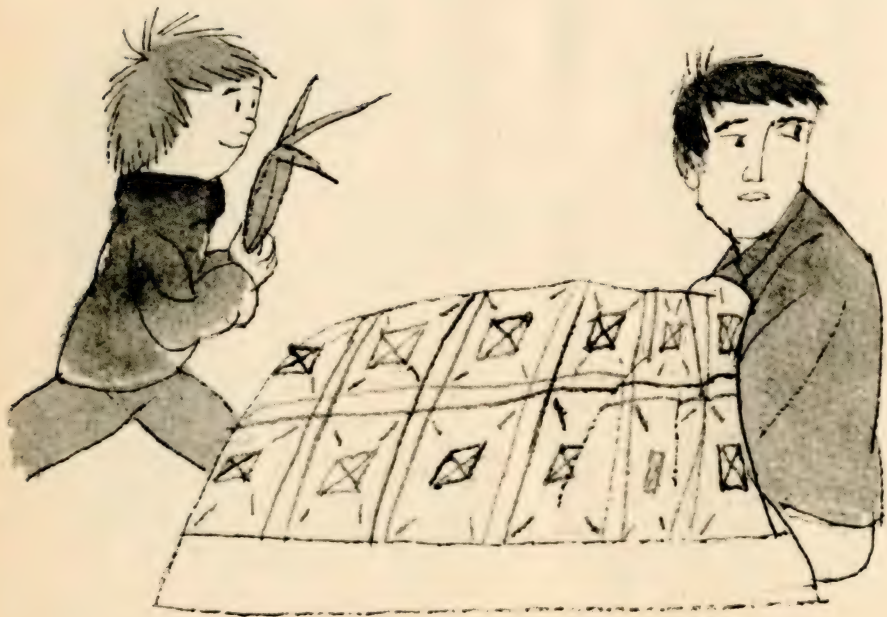
いそがしそうにはたらいていたおばさんは、すぐそばをうっているたなを見てくれましたが、うりきれたあとでした。
「もうないよ、一つも。三時ごろまではあったんだけど、ひろぼう、おそいんだよ、くるのが。」
おばさんはそういうと、ほかのお客さんのあいてをはじめました。
「チェッ、ないのか。とうちゃんがかえってきたら、お目玉だ。」
ついてきたあきらが、小さい声でいいました。
「ね、うちにあるかもしれないよ。ぼくのパパ、おそばが大すきだから、ママ、たくさん買うんだ。」
「そんなことしたらわるいよ、せっかく買っておくのに。」
「いいの、いいの。」
ひろしとあきらは、あきらの家へいってみました。
おかあさんが、台所で仕事をしていました。
「ママ、おそばある。」
「あるけど、なぜそんなことをきくの。」
「ひろしちゃん、大みそかのおそば、おとうさんにたのまれたのに、わすれちゃって、いま気

がついたの。そしたら、ストアでもう、うりきれてしまったんだ。」
「いいんです、おばさん。」
ひろしが、ばかにていねいなことばでいいました。
おかあさんはれいぞう庫をあけると、そばの玉を三つとりだし、紙につつんでくれました。
「はい。おとうさんは二つ、ひろしちゃんは一つ。おうちにかえったら、れいぞう庫に入れておきなさい。」
「おばさん、サンキュー、お金いくら。」
「いいのよ、大みそかのプレゼント。」
ひろしとあきらは、ひろしの家へいきました。
「大みそかのプレゼントだって、はじめてきいたよ、おもしろいおばさん。」
ひろしは、れいぞう庫にそばをしまうと、安心したようにむねをなでました。

ひろしのとうちゃんはだいくですから、いつもおそいのです。大みそかも同じです。
それなのに、どうしたのでしょう、その日は五時ぴったりにかえってきました。
「ひろし、お客さんをつれてきたぞ。」

「お客さんだなんて、わたし、お手つだいにきただけですよ。」
げんかんで、とうちゃんと女の人の声がしたので、ひろしはなんだろうと思って、でてみました。
とうちゃんより、ずっとわかい女の人が立っていました。いや、年はとうちゃんと同じくらいかもしれません。きれいだからわかく見えるんだな、とひろしは思いました。
「よし子さん、あがれよ、男ふたりでちらかしているけど。」
よし子さんとよばれた女の人は、ひろしを見るとにこっとしました。
「まあ、りこうそうなぼうや、何年生。」
ひろしはめずらしく顔を赤くし、下をむいてしまいました。
「よせやい、りこうそうだなんて、四年生なんだけど、勉強のほうは、からっきしダメのスッテンテン。遊びとくりゃあ、名人なんだけど、な、ひろぼう。」
とうちゃんは、ひろしの頭をてのひらで、ぐいとうしろにおしました。
「えらいじゃない、おとうさんとふたりでくらしているんですもの。」
ひろしは、とうちゃんと女の人について、茶の間にはいっていきました。
「ひろし、そば買ってきたか。」

「うん。」
「きょうは、三人で大みそかのそばを食べるか。三人で食べるなんて、三年ぶりだもんな。」
ひろしは女の人を、上目づかいにそっと見ました。すらっとしていて、目が大きく、とてもやさしそうです。
（いい人なんだな、この人、とうちゃんのガール・フレンドかな。）
と、ひろしは思いました。
とうちゃんは、れいぞう庫をごそごそやっていましたが、そばを見つけたらしく、びっくりしたような声でいいました。
「ひろし、よく気がついたな、三つも買ってきて。よし子おばさんくるの、知ってたのか。」
ひろしは、あきらの家からもらったことをいおうかいうまいか、まよいましたが、いわないことにしました。
「わたし、おそばつくりますよ。わかいときおそば屋さんでバイトしたので、けっこううまいんですよ。」
「そいつはいい、今夜はしばらくぶりで、人のつくってくれたものを食べるとしようか。そうそう、れいぞう庫にとり肉もあるから、とりそばをごちそうしてもらおう。」

とうちゃんは大きな声でわらうと、こたつにはいりこみました。
「ゆっくりしていてください、ぼうやもね。すぐできますから。」
女の人は、くるくるうごきまわってはたらきはじめました。
「ネギは、庭の物置だ、ひろしもってこい。」
ひろしはすぐ物置にいって、ネギを二、三本もってきました。
「いま、すぐお酒をつけますから、もうすこしまってくださいね。それから、ひろしちゃんっていったわね、おばさん、おいしいタイヤキ買ってきたの。そら、そのかばんの中。食べてちょうだい。」
ひろしはちょっとえんりょしましたが、と

うちゃんが、
「ひろし、食べろよ、子どもはえんりょなんかするもんじゃあねえ。」
というものですから、かばんの中からあったかいタイヤキをとりだすと、食べはじめました。
いつになく、とうちゃんもゆっくりです。
いつもはかえるとすぐ、ひろしに手つだわせて夕ごはんのしたくをするのですが、きょうはしなくてもいいのです。
「はい、とりそば一ちょうあがあり。」
女の人は、ゆげがさかんにでているそばのどんぶりを、ひろしの前にだしてくれました。白いゆげのむこうで、女の人の白い顔がわらっています。
「こんどはお酒。」
女の人は、ほんとうによくはたらきます。
なんだかへやの中が、ぽおーっとあたたかくなったようです。
お酒を二、三ばいのんでいたとうちゃんが、思いきったようにいいました。
「な、とうちゃん、およめさんもらうことにしたんだ、いいだろう、ひろし。」

ひろしは、そばを食べるのをやめて、とうちゃんの顔を見ました。すこしはずかしそうなとうちゃんの顔です。

「およめさんになってくれるのは、ここにいるおばさん、よし子さんだ。いま、保育園の先生なんだけど、子どもが大すきなんだ。」

ひろしは、ちらっと女の人を見ました。

女の人は、せなかをこっちにむけ、台所でおさしみを切っていました。
そのうしろすがたが、すこしふるえていました。
ひろしはそっと、死んだかあちゃんのぶつだんのほうを見てからいいました。
「いいよ、とうちゃん。とうちゃんのおよめさんなら、おれのかあちゃんだろ。」
「いいか、ひろし。」
とうちゃんは、さかずきをおくと、ぎゅっとひろしをだきました。
くるっとこちらをむいた、あたらしいかあちゃんの目から、なみだがポトンとおちました。

雪の中の登校

高橋昭

げんかんのガラス戸ごしに外のようすを見た雄一は、

「うわっ、ひでえ雪だっ。」

と、とんきょうな声でさけんでしまいました。

「ほんとだ。すっげえなあ……。」

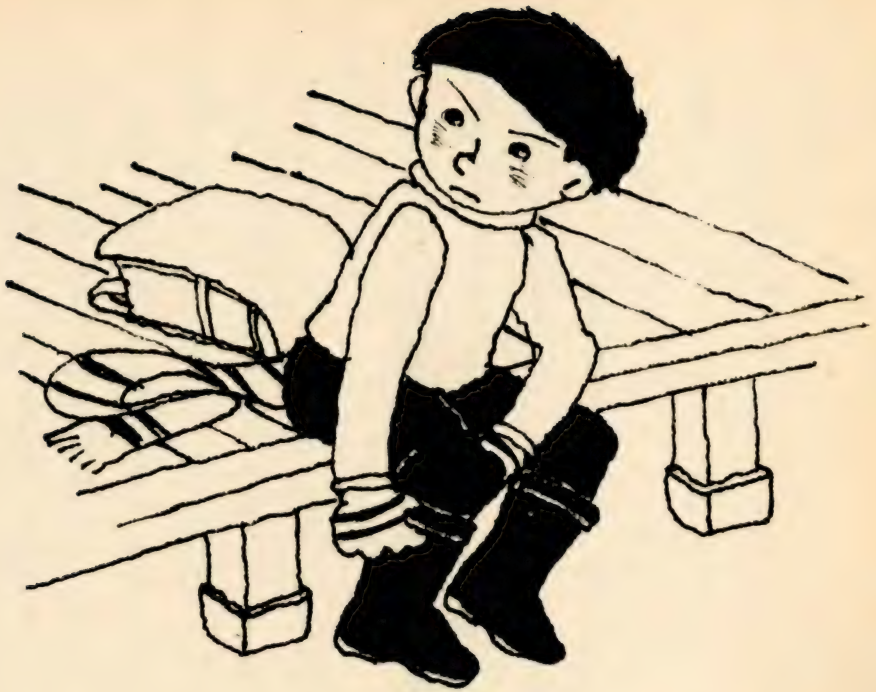
あとからきた弟の健が、目をまるくしてのぞきこみます。

家の前は戸口のあたりをすこしだけのこして、一面に大きな雪の山でした。二年生の健はもちろんのこと、四年生としては大きいほうの雄一のせよりも高くつもっています。

「あんちゃん。ゆうべ一ばんで、こんたにふったのだべか?」

「いやちがうべ。健、ゆうべの寒ぷき知らなかったのか?」

「寒ぷき？」
「そうよ。真夜中あたりから、ヒューン、ヒューンって一ばんじゅうふきどおしだったぞ。したから、こんたにふきだまりができたのだべじゃ。」
「へえー。」
健の目が、みるみるうちに大きくなります。
そういえば健には、ゆうべ、トタンぶきの屋根が、バタバタ、ガンガンと、ものすごい音をたてていたような気がします。
「あんちゃん。たまげた雪だなあ。」
「うん。こんたらの、はじめてだじゃ。」
雪の山は、上のほうがぐーんとでっぱり、まん中あたりがへこんでいます。ちょうど、つきたてた手の甲を、思いっきりそらしたときのようなかっこうです。
「雄一も健も、こんたら日には、むりしていかなくてもいいんだじゃ。」
ふたりが雪の山をながめていると、いろりのほうから、ばばちゃんの声がきこえてきました。
(ほんとだ。こんたらとき、学校さいけるべか。)
雄一の心の中に、ふっとこんな気持ちがおこりました。

雄一と健が、パチパチもえるいろりのそばで、ごはんを食べているところへ、
「おー、さぶさぶ（さむい、さむい）。」
といいながら、かあちゃんがもどってきました。
「どうだっけ？　いけるようだかや？」
ばばちゃんが、心配そうにききました。
「そうだなし。かなりおっきなふきだまりもあったけど、家の前ほどではないようだす。」
「そーかえ。だども、こんたらとき、むりしていかなくてもいがんべじゃ。」
（ほんになや。したら、きょうはやすむかなあ。）
口をあぐあぐさせてごはんをかっこんでいた雄一は、ばばちゃんのほうを見てそっとつぶやきましたが、そのときふっと、いつもとうちゃんにいわれていることばがうかんできました。
「ええか。このあらき（かいたく地）でひとりまえのひゃくしょうになるには、雪や雨風に負けていてはだめなんだじゃ。」
雄一は思わずはっとなりました。そして、
「そうだ。こんたら雪に負けてなんかいられるか。おどうたちだって、山でがんばっているのにさ。」

とつぶやき、大いそぎではしをうごかしました。とうちゃんとじじちゃんは、雄一たちの家からもっともっとおくの山かげに、そまつな小屋をつくり、そこで炭をやいているのでした。

やがて、朝ごはんをすませた雄一は、

「健、したくするべ。」

といって立ちあがりました。

「この雪だと、長ぐつもなんも、すぽっとかくれてしまうぞ。思いっきりびんとまるげよ。」

雄一はひざ近くまである長ぐつの入り口を、なわでかたくしばりつけました。

長ぐつのつぎはからだです。いつもやってるように、毛糸のえりまきで頭と顔をつつみ、その上にアノラックのぼうしをかぶせまし

た。弟の健も、手ばやく身じたくをしていきます。
「健、できたか？」
「うん。できた。」
「よしきた。したら、いぐが。」
雄一がげんかんをでようとすると、ばばちゃんとかあちゃんの声が、せなかごしにきこえてきました。
「気いつけていけよ。いけなかったら、むりしないでもどってくるんだじゃ。」
「とちゅうまでおくってやるべか？」
「なあに、へっちゃらだ。まかせておけ。」
雄一は力づよく返事したあと、ギギイーッ、ガラガラッと入り口の戸をあけました。
そのとたん、氷のようにつめたい風が、ほっぺたにバシッとぶつかってきました。
「うっ……。」
雄一は、思わず目をつぶりました。
「うわあっ……。」
健がひめいをあげながら、雄一のからだにすがりつきます。

「いいか健、あんちゃんからはなれるなよ。風がふいてきたら、いまのようにするんだじゃ。」
「うんっ。」
外にでたら、道は雪ですっかりうまっていました。さっきようすを見にいってきたかあちゃんのくつのあとが、ところどころにうっすらと見えるだけです。
(うーん、ひでえ。こりゃたいへんだぞ……。)
右も左も、前もうしろも、雪だらけです。遠くのほうにぽつりぽつりと立っている木も、雪にすっぽりつつまれ、ちょっと見ただけでは木なのかどうかははっきりしません。
「健、あんちゃんさ、びんとくっついてこいよ。」
雄一は、前のほうを見つめながら、ぴりっとした声でいいました。
「うんっ……。」
健が、きんちょうした声で答えます。
家をですこしいくと、そのあたりでいちばん高いところにつきました。遠くの山もすぐ近くの丘も、どこもかしこも雪だらけ。じっと見ていると、目がちかちかしてきます。
「あんちゃん、まぶしいなあ。」
「うん。……さあ、いそぐべ。」

そこから下の道までのあいだには、いがいと雪がありませんでした。いっぱいつもったときの目じるしにと、とうちゃんが道のりょうわきに立ててくれた木のぼうも、その先にむすんである赤いぬのきれも、はっきり見えます。

「なあーんだ。こんたら道なんか、わけないじゃ。あんちゃん、ゆうべの風で、雪ぁみんなとばされてしまったんだべな。」

健が、ほっとしたような声でいいました。

「うん。したども、まだ安心できないぞ。」

坂をおりてひろい道にでたら、雄一のいったとおりでした。すこしさきに、とんでもなく大きなふきだまりがあったのです。

「うわあ。あんちゃん、いけるべか？」

「うん。ひでえなあ。りょうがわが高くて、ここだけほとんとひくくなってるべ。だしけ、とばされてきた雪が、みんなここさたまったのよ。」

雪の山は、雄一のこし近くまでもありそうです。

「健、どやする？」

雄一はそういって、うしろの健をふりかえりました。小さい健にはとてもむりだという気が

したからです。
雄一は、ひきかえそうかどうか、まよいました。
が、そのとき、とうちゃんの顔がとつぜんうかんできました。
「いいか雄一。山の子どもは、これくらいの雪に負けていてはだめなんだじゃ。」
そうさけぶ声も、きこえてくるような気がしました。
（そうだ。おどうのいうとおりだ。こんたら雪に負けてなんかいられるかっ。）
雄一は、もう一度、健をふりかえってききました。
「健、いけるか？」
すぐに元気のいい声がかえってきました。
「うんっ。こんたら雪、おら、へっちゃらだ。」
「ようしっ。あんちゃんが道をつけてやるからついてこいよ。なあに、あんちゃんがいるからだいじょうぶだ。」
雄一はわざとにっこりわらったあと、目の前の雪の山にむかって、いきおいよくつっこみました。
雪は、雄一のもものあたりまでもありました。

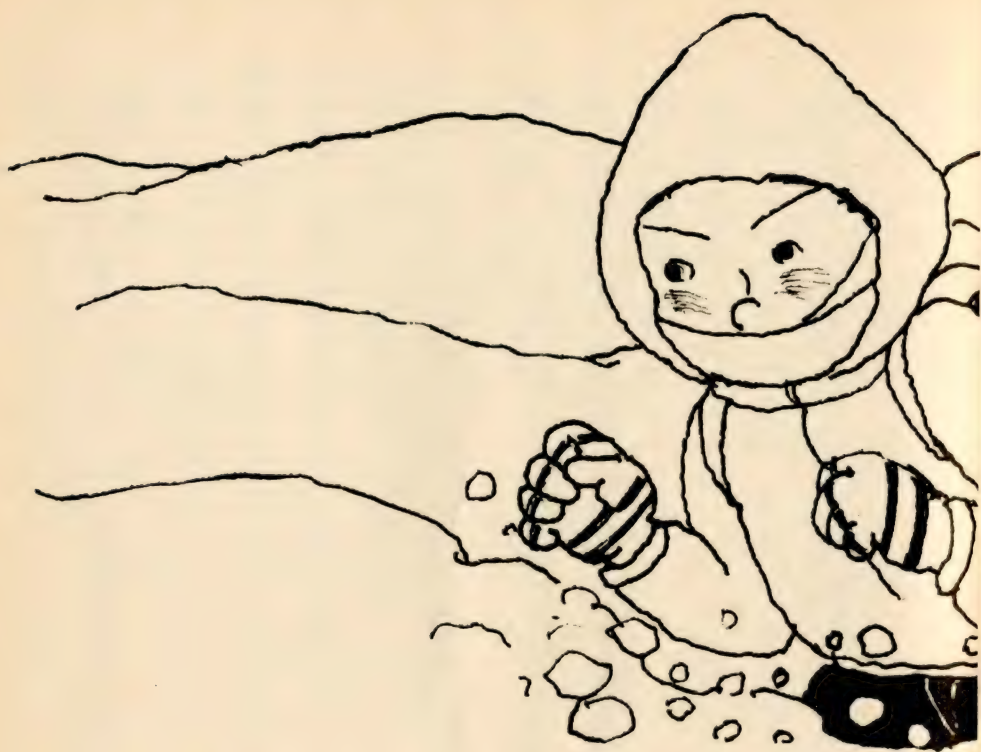
「なにくそっ。負けるもんか。」
「あんちゃん。おらだって負けないぞ。」
「うん。健、がんばれよ。」
雄一は、長ぐつの底でのしのしと雪をふみかためながら、しゃにむにすすんでいきました。あとにつづく健は、ときどき、よろけてしりもちをついたり、足をふみはずしてふかい雪の中にはいったりしました。そのたびに雄一は、健のからだをおこしてやり、「健、負けるなよ。」「健、がんばれ!」などと力づけました。
雪の山は、あるいてもあるいてもなくなりません。そのうえいじのわるいことに、ヒューン、ヒューンとつよい風までがふきだしてきました。
ヒューン、バシッ。
ビューン、バシンッ……。
つめたい風が雄一のほっぺたをめちゃくちゃにたたきつけ、たちまち、はりをつきさされたようないたみにおそわれてしまいました。
「うっ、ううーっ……。」
もう息もついていられないほどです。それでも雄一は、「健、あんちゃんのかげさかくれろ。」

といって、じぶんのからだで健をかばい、風が通りすぎるのをまちました。

五、六分ほどして、風がしずまったので、ふたたびあるきはじめました。だが雄一のももは、いくらもしないうちに、ぼうのようになってきました。顔やからだがぼうぼうとほてり、息もぜいぜいしだしました。だけど、やすんでなんかいられません。

「なにくそっ、負けるものか。」

「健、へこたれるなよ。」

雄一は健をはげましはげまし、雪をこぎつづけました。健は雄一のアノラックのはしをびーんとつかみ、必死になってついてきます。

「健、だいじょうぶか？」
とちゅうまできたとき、雄一はきゅうに心配になって立ちどまりました。ハアッ、ハアッという健のあらい息が、耳にはいってきたからでした。
「うーん。だいじょうぶだ。」
雪だるまみたいになった健が、くるしそうな息の中で答えました。
「そうか。健、なかなかやるぞっ……。」
雄一は健の雪をはらってやったあと、
「よいしょっ。」と足をふみだしました。
そのとたん、とんでもなくつよい風がゴオーッとふいてきて、雪けむりがバアーッと立ちのぼりました。
あたりはもう、なに一つ見えません。

バシッ、バシッ、グワーン……。
はりのような雪のつぶが、雄一の顔めがけておそいかかってきます。
「うわっ。健、かくれろっ。」
思わず立ちどまった雄一は、
「いけなかったら、むりしないでもどってこいよ。」
といってたばばちゃんのことばを思いだし、
(やっぱりもどったほうがいいかなあ。)
と、つい弱気をおこしてしまいました。だがそのとき、またとうちゃんの顔がうかびあがりました。
「雄一、がんばれっ。負けるんでないぞ。」
すぐそこで、とうちゃんがさけんでいるような気もしました。
「健、いけるか?」
雄一は大きな声でききました。
「うん。いけるっ。」
健は元気よく答え、アノラックをつかんでいる手に力を入れました。

どのくらいあるいたときでしょう。雄一はとつぜん、「健、見ろ！」とさけんで前方を指さしました。あれほどあった雪が、うそのようにへっていました。やっとのことで、大きな雪の山をこえたのです。

「いがったなあ、健。」

「健、よくやったぞっ。」

雄一は、にっこりわらって、健をふりかえりました。

「うんっ……。」

健の顔は、ゆげがぼうぼう立ちのぼり、まるでゆでだこみたいです。

「健、えらいぞ。健は雪なんかに負けなかったんだぞっ。」

雄一はがまんできないほどくたくただったけれど、雪だらけの健の頭に手をのせて、もう一度にっこりわらいかけました。

「うん。あんちゃんのおかげだじゃ。」

健もうれしそうに目をほそめました。

それからも雄一は、何回か雪の山にぶつかりました。目じるしの赤いぬのきれが見えなくて道をふみはずし、雪の中にずぼっとおちたりもしました。けれど、そのたびにとうちゃんのこ

とばを思いだし、「なにくそっ。こんたら雪に負(ま)けられるか!」「健(けん)、がんばれよ。」といいながら、前へ前へとすすんでいきました。
ふたりの雪とのたたかいがおわったのは、家をでてから二時間ぐらいもたったころでした。道のりょうがわにつづいていた高いがけがとつぜん切れ、目の前がぱっと明るくなったと思ったら、ずっとさきのほうに、ぽつりぽつりと家が見えてきたのでした。
どれも雪をずっぽりかぶっていました。小学校の赤い屋根(やね)が、いちばん遠くに見えています。かいたくぶらくの人たちが、元村(もとむら)とよんでいるところです。
「わあっ。とうとうついたぞ。あんちゃん、いがったなあ。……。」

「うん。ここまでくれば、しめたもんだ。」
ふたりは顔を見あわせて、にこにこーっとわらいました。とたんに雄一は、いきかえったような気持ちになりました。そして、
（おかあ。おらたち、とうとう雪の山をこえたぞー。）
（おどう。おらも健も、雪なんかに負けなかったんだぞー。）
と、大声でさけびだしたくなりました。
いつのまにか風もすっかりやみ、灰色の雪のあいだに、金色の太陽がぽっかりうかんでいました。そして、その光をうけたたくさんの雪のつぶが、あちこちで、きらっきらっとひかりだしていました。
「うわあっ、きれいだ。健、いぐべ……。」
雄一は、ふかい雪につつまれた学校めざして、いきおいよくかけだしました。

解説

ご両親や先生がたへ

木暮正夫

「さすがに四年生になると、しっかりしてくるな――。」

編集をおえて、わたしは実感しました。からだの発育はもちろんのこと、家庭や学校や社会のなかでの自分の存在にめざめ、自分をしっかり自覚しはじめる四年生。

この本には、さまざまな四年生のすがたが、多角的にとらえられています。全体をとおして、現代のいきいきとした四年生の群像が、くっきりとうきぼりにされていると思います。いま現在、四年生の子どもたちだけでなく、これから四年生になる子どもたちにも、かつて四年生だった子どもたちにも、たのしく読んでもらえそうな作品で構成しました。

創作短編のかたちをとってはいますが、ほとんどの作品が実際にあった身近なできごとに材をとったり、具体的なモデルをイメージしてえがかれました。いってみれば、現代に生きる全国の四年生の子どもたちの生活と意見を作品化した、ユニークなアンソロジーなのです。子どもたちひとりひとりの主張や願いが、どの作品からもつたわってきます。

この『新・子どもの広場』は、一九七六年に刊行された『子どもの広場』シリーズの第二期にあたります。年数はわずかなへだたりしかありませんが、子どもたちをとりまく状況は、年ごとにきびしさを増しています。それを子どもたちはどう受けとめているのでしょう。おとなであるわたしたちが、なにをしなければならないか、という問題提起をふくむ作品も、見おとさないでほしいと思います。

『牛なかせ当番』(加藤多一)は酪農に生きる一家のすがたを、わたし(ユキエ)の目をとおしてリアルにえがいています。いまの子どもははたらかないといわれますが、それは手つだいたくとも手つだうことのない、都会の子どもたちのこと。地域で農業にたずさわる家では、子どもも仕事を分担し、責任をはたしています。労働への参加によってつちかわれる自立の心、すばらしいと思います。酪農農家の現実をふまえて、姉を思いやるユキエの心情が、さわやかにつたわってきます。

思いやりの心は、豪雪をふみしめて二年生の弟をかばいながら登校していく、**『雪の中の登校』**(高橋昭)の雄一のすがたからも、あざやかに読みとれます。わたしたちは、ともすると、都会中心にものを見たり考えたりしがちですが、登校にさえ、これほど困難のともなう地域の子どもたちの現実にも、目をむけてください。困難をはねのけて生きる多くの雄一たちに、わたしは声援をおくらないではいられません。

兄弟愛は**『ぼくのグッピー二〇一号』**(佐藤ノブ子)にもえがかれました。ぼくの気持ちをしっていてくれた兄。信頼のきずなのつよさが、結末にいたってあふれます。同じ兄弟愛でも、**『スカートをはかない女の子』**(鬼塚りつ子)の主人公なお子は、やさしくおとなしい兄のために、すもう大会に出場。みごと賞品のプラモデルを兄にプレゼントします。スカートがきらいな、女の子らしくない女の子が多くなっているときさます。キャリア・ウーマンの時代傾向のあらわれかもしれません。

つよい女の子は**『ユミとイサムはけんか友だち』**(三田照子)にもえがかれました。ユミは教室のキャリア・ウーマン的存在でしたが、病気によってすっかり性格がかわり、学校ぎらいに

なってしまいました。そのユミをはげますクラスメートと、けんか相手だったイサムの心の交流。やさしさや思いやりの心は、おとながうえつけるものではなく、ほんとう、子どもたちがもっているものだということを再確認させる一編です。

『しげるのねずみ文庫』（上田敏子）の主人公しげるは、妹が生まれるとき、いなかのおじいさんの家にひとりであずけられた経験から、てっちゃんのつれてきたたかちゃんの気持ちを理解し、つよしと〈ねずみ文庫〉を開いて、読み聞かせをします。やはり、四年生はちがうなあ、と思わせます。

友情や子どもどうしの連帯をテーマにしたものに、**『日曜日のやくそく』**（国松俊英）や、**『あいつのアカンベエ』**（佐伯道子）、**『小山城とかいじゅうグオー』**（山田もと）などがあります。けんかをしても仲なおりのしかたがわからない子どもがふえているいま、これらの作品は子どもたちに友情のあり方や仲間意識について考えさせるでしょう。**『おれたちの花火大会』**（木村研）は、いまの子どもたちの合理精神をユーモラスでテンポのある文章でえがいています。

先生にほのかな想いをよせる気持ちは、男の子でも女の子でも、時期の前後はあれ、共通してもつものですが、**『四年生のプレゼント』**（市川栄一）はその心理を軽快なタッチでえがきだしています。

この年代の子どもたちの心理は、おとなであるわたしたちの想像を超えて、複雑にゆれうごくこともまれではありません。**『オタマジャクシ日記』**（那須正幹）からは、いつわりの観察日記を書いた悦子の気持ちが手にとるようにつたわってきます。また、**『かなしかった雲』**（たかはしひでお）では、ヒロミをからかう鏡のいたずらをめぐって男の子たちの屈折した心理がえ

がかれました。施設にあずけられているロボと、里親であるオッタンとの心のかよいあいを、きめこまかにえがきだした、『**ロボの夕やけ**』（ゆさしゅくこ）からは、ずっしりとした感動のひろがりに胸うたれます。

女性が経済的にも自立しつつあるせいでしょうか。離婚率は年々高くなっていきます。ケストナーのことばを引用するまでもなく、両親が離婚しないために不幸を強いられる子どもたちがいることも事実ですが、『**大みそかは三人で**』（倉持正夫）と、『**四年のあの子は宇宙人**』（佐藤晶子）はともに、再婚というできごとにであった子どもをえがいています。かたや父親の再婚、かたや母親の再婚。どちらも深刻さなどなく、さらりと明るくえがいています。こんなところにも、シリーズ第一期を発刊したころとの時代の変化が見られるように思われました。第一期の『四年四組さくら色』もこの機会に子どもたちにおすすめいただければさいわいです。

子どもたちの共感を得て、本書『新・子どもの広場』が、以前にも増して読みつがれることを、編者のひとりとして願っております。

●**著者紹介**

大日方寛　一九二六年長野県生まれ。現在、高等学校教諭。《日本児童文学者協会》《子どもと詩》文学会会員。《とうげの旗》同人。佐久市在住。

加藤多一　一九三四年北海道生まれ。現在、札幌市職員。《日本児童文学者協会》《北海道児童文学の会》《日本童話会》会員。札幌市在住。

国松俊英　一九四〇年滋賀県生まれ。《日本児童文学者協会》会員。船橋市在住。

山田もと　一九二〇年愛知県生まれ。《中部児童文学会》同人。愛知県田原町在住。

木村研　一九四九年鳥取県生まれ。《7と8の会》会員。柏市在住。

鬼塚りつ子　一九四〇年鹿児島県生まれ。《ななき》《きつつき》同人。浦和市在住。

上田敏子　一九三九年東京都生まれ。《きつつき》同人。東京都在住。

佐伯道子　一九四二年茨城県生まれ。《日本童話会》会員。浦和市在住。

佐藤ノブ子　一九三七年岩手県生まれ。《ノロギ・ボッコ》同人。盛岡市在住。

那須正幹　一九四二年広島県生まれ。《日本児童文学者協会》《日本子どもの本研究会》会員。《児童文学創作集団》所属。防府市在住。

ゆさしゅくこ　本名・遊佐淑子。一九二六年宮城県生まれ。《日本児童文学者協会》会員。《ノロギ・ボッコ》《東京四季》同人。江刺市在住。

三田照子　一九三三年徳島県生まれ。《徳島児童文学会》会員。徳島市在住。

市川栄一　一九二九年埼玉県生まれ。現在、小学校教師。《日本児童文学者協会》評議員、《日本子どもの本研究会》会員、《秩父児童文学の会》会長。秩父市在住。

佐藤晶子　一九五七年山形県生まれ。《きつつき》同人。大宮市在住。

たかはしひでお　本名・高橋秀雄。一九四八年栃木県生まれ。《日本児童文学者協会》会員。《ななき》《風の街》《ふらここ》同人。宇都宮市在住。

倉持正夫　一九二二年茨城県生まれ。現在、小学校教師。《日本児童文学者協会》評議員、《日本子どもの本研究会》会員。《じゃんけんぽん》主宰。《青い星》同人。日立市在住。

高橋昭　一九二九年岩手県生まれ。現在、小学校教頭。《日本児童文学者協会》《日本子どもの本研究会》会員。岩手県浄法寺町在住。

新・子どもの広場／4年生

四年のあの子は宇宙人

N.D.C. 913　偕成社 198P.　22cm　1983年

1982年12月　1刷
1983年3月　2刷

編者　日本児童文学者協会
発行者　今村廣
印刷　新興印刷製本株式会社
製本　中央精版印刷株式会社

発行所　株式会社　偕成社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5
TEL 03-260-3229（編集）〒162
03-260-3221（その他）
振替　東京5-1352番

published by KAISEI-SHA　ISBN4-03-919140-4

もう一つの
「子どもの広場」
も読んでみま
せんか

学年別
子どもの広場
シリーズ

日本児童文学者協会／編

編集委員　北川幸比古・木暮正夫
長崎源之助・宮川ひろ

この本の中の主人公は、
いずれも、あなたと同じ年ごろの、
いまの日本の子どもたちです。
全国の友だちは、いま、
どんな遊びをし、なにを考えながら、
生きているのでしょうか。
きみに似た子もいるかもしれません。
あなたと反対な子もいるかもしれません。
さあ、本の中から、
すてきな友だちを見つけてください。

1 くじらになった一年生
2 コックさんは二年生
3 走れ『三年二組号』
4 四年四組さくら色
5 五年の夏やすみ
6 風にのる六年生

子ども世界の実態をえがいた童話集

菊判・カバー装・平均194ページ・各12〜19編収録

新子どもの広場 4年生

偕成社／定価880円

この本は全国の学校・文庫・塾・子ども劇場の先生やおかあさん・児童文学者など、日ごろ子どもたちに接している方たちが、現代の子どもの生活を素材に、その実態をいきいきと描いた短編集です。日本各地のいろんな友だちが元気にゆかいに登場します。

ISBN4-03-919140-4 C8393 ¥880E